

# 佐田介石『闇中案』卷之下注釈

梅 林 誠 爾

本注釈は、「佐田介石『闇中案』卷之一・卷之二注釈」(『熊本県立大学文学部紀要』第一七巻通巻第七〇号、二〇一一年三月。「前回注釈」と略)の続編である。ここでは、三巻から成る佐田介石著『闇中案』の最後の巻について注釈を試みる。

## 凡例(再掲)

- 一、以下の注釈においては、龍谷大学大宮図書館所蔵の写本『闇中案』を底本とした。
- 一、各丁の表裏毎にまとめて翻刻を試み、注解を付けた。
- 一、まず【本文○丁表・裏】として、その一丁の行数や一行の字数を可能な限り底本通り再現した。一

行、五行、十行の頭にローマ数字の行番号を付けた。

- 一、俗字や略字、誤字や癖字と思われる箇所については、CJK統合漢字を基準に訂正し、訂正箇所には傍線を付けた。ただし、幾つかの箇所は、元の字を示して推測される正字等を横に括弧書きで付けた。また、引用文については、原本に照らして修正した。
- 一、底本原文にない文字を補う時には、～で括付た。

- 一、原文は句読点、括弧を含んでいないが、句読点、括弧を補った。引用されたり言及されている語句は「」で、書籍名は『』で括付た。

一、元々漢字の読み（ルビ）がカタカナで付けてある場合はそのまま表記し、読みを補う場合は平仮名を用いた。

などと表記した。

一、各丁の翻刻の後に《字句注》欄を設け、字句の意味や正誤について簡単に説明した。

一、底本の文字間に空きが認められるときは、□□□

一、その後に、事項や本文の解説を加えた。その際、対象の文をその行番号で示した。

注釈

【二丁裏】

I・客窓漫駁卷之下

島村七五三八撰

『新論』「下卷」第一難 須弥焉アリ」ト云ヨリ、四昏七行至ル。

駁シテ曰、汝カコノ「下「卷」」ノ弁ニ「極下ニ至ル事ヲ得ハ、定メテ

V・吾佛説ノ須弥界ヲ見ルヘシ」ト云カ、云何ナル杜撰

ソヤ。須弥アレハコソ見ヘキ理モアレ。須弥ト云ヘル

モノ何處ニアルヤ。其故何トナレハ、汝カ説ニテハ日月

衆星トモニ須弥ヲ中心トシテ其四洲ノ天ヲ旋ルト

ス。爾ルニ現見スル處、日月衆星トモニ何モ須弥

X・ヲハ中心トセスシテ、吾ノ如ク却テ地極ヲ中心トシテ旋

レハコソ、『論語』ニモ「北辰居其處、衆星拱之」トイ

ワレ、又衆星トハ日月及ヒ恒星ト五星トナリ。

コレハ曆象ノ天文ノミナラハ凡目ノ徒ト婦人小童

《字句注》

一 一行「拱」こまぬく。両手を胸の前で重ね合わせる礼法。

《解説》

一行「表題」「闇中案」一、二巻の表題は「客窓漫駁巻之  
一 一名闇中案」、「客窓漫駁巻之二」であった。今回注釈を  
試みる最終巻の表題は、「客窓漫駁巻之下」となっている。

『闇中案』は、禿安慧の『護法新論』（慶応三年刊、『新論』と略）  
を批判した論争書で、明治一〇年秋以降の執筆と推測される。  
『新論』巻之上は、「円準之理」などの自説を隠さず示すとい  
う意味の「無隠篇」という題を持っていた。巻之中「平邪篇」  
は、西洋天文説批判であった。巻之下には「護城篇」という  
題があり、安慧は、仏説に対する洋学者からの論難への反論  
を試みている。その反論を介石が批判してゆく。

三行 安慧の『新論』巻之下、三丁表六行から四丁裏七行  
を指す。そこで、安慧は、洋学者からの論難「第一難 須弥  
焉<sup>いすとか</sup>アリ」（地球のどこに須弥山が在るのか、在るはずがな  
い）を取り上げ、まず洋学者たちが論拠とする二つの理由を  
紹介している。一つは、地は間違はなく「周圍凡一萬五千里、  
全徑五千里可リ」の球であるが、この程度の地球上に「佛教  
二説ケル「一辺も高さも」八萬由旬「約四八万里。由旬は印

一 三行「凡目」…俗人の目、俗眼。

度里法の単位。一二丁表《解説》参照。」ノ邈遠廣大ノ須弥  
が存在することは不可能だという理由である。次に、「此コ」須  
弥「ニ到リ、…是ヲ視シ」人はいないという理由である。須  
弥山の存在が、地球の大きさとの比較から、また経験的証拠  
を欠くということから、否定されている。

安慧は、最初の理由に対し、空気が観測者の視線を屈折さ  
せるため、「須弥界ノ廣大ナルモ、人目ニハ狭小ノ形チニ縮  
象シテ視ユル」「三丁裏」のだと、「円準之理」により答える。  
洋学者は、世界の広大な真の姿を、縮小した見えの姿（地球）  
に基づいて否定しているに過ぎないというのである。後の理  
由に対して、安慧は、洋学啓蒙書『博物新編』も南北二極に  
到り見ることができないと認めながら、それでも地が球であ  
ると言うのは、それこそ証拠を欠く教術の臆断に過ぎないと  
反論する。そして、須弥界は釈迦の天眼の徹視するところだ  
あるから、「若シ極下ニ到ルコトヲ得ハ、定テ吾佛説ノ須弥  
界ヲ見ルヘシ」「四丁表」と続いている。

四行く七行 安慧の反論が批判される。『闇中案』は、「極

下ニ到ルコトヲ得ハ、須弥界ヲ見ルヘシ」という安慧に「須弥アレハコソ見ヘキ理モアレ。須弥ト云ヘルモノ何處ニアルヤ」と問い返している。須弥を見ることができるか否かよりも前に、須弥が存在するのかどうか、また北極との関係において須弥がどこに存在するのかを、問題にすべきだと批判している。

七行〜一二丁表四行 仏説は、天文現象の中心に須弥山を置く。安慧の「若シ極下ニ到ルコトヲ得ハ、須弥界ヲ見ルヘシ」も、天の北極を中心とした日月衆星の廻りを、須弥山を中心とした廻りに解消することを意図している。それに対して、『闇中案』は、「日月衆星委ク北極ヲ中心トシテ旋ル事ハカリハ、『論語』の記述とも合致し、「凡日ノ徒ト婦人小童」を問わず皆認めることだと指摘して、洋学者などの北極中心説と仏説の須弥中心説との対立を、際立たせている。

ところで、四行からの批判は、「汝カ説」即ち安慧の説への介石の批判と見ることができ。しかし、それは、洋学者からの仏説への論難に対する安慧の反論に対する批判であるから、「汝カ説」即ち仏説への「吾」即ち洋学者からの（再）批判でもある。実は、写本肥後介石撰『須彌視實等象儀記』執筆年等記載なし。以下『須彌儀記』と略が龍谷大学大宮図書館に所蔵されていて、その四丁表裏には、『闇中案』のこ

の部分とそっくりの内容が、「我佛説」に対する「蘭曆家ノ疑」として書かれている。例えば、『闇中案』一二丁裏九行・一〇行と同じ仏説批判が、『須彌儀記』にも「現見スルニ、ソノ須弥ヲ以中心トシテ旋ルニ非スシテ、却テ圖ノ如ク北極星ヲ以中心トシテ旋レリ」と語られている。さらに『闇中案』の「日月衆星北極ヲ中心トスル圖」（一二丁表）も、『論語』からの引用も一致している。こうした『須彌儀記』の「蘭曆家ノ疑」との一致からも、『闇中案』の安慧批判が、洋学者が語る仏説批判であることが分かる。

介石が、洋学者のこの批判を一度ならず引くのは、北極を天文現象の中心に置き、「須弥焉アリ」と須弥山の存在を問う「蘭曆家ノ疑」を、介石が重要な問題提起として受け止めるからである。『須彌儀記』「六丁裏〜七丁表」は、安政二年「一八五五年」、介石ら本願寺学林の所化（学生）たちが、「蘭曆家」から提起されたこの「疑」に遭遇し、それを須弥説への重要な問題提起と考え、介石は多年研究しその「氷釋」を得ることができたと語っている。

さらに、介石が、洋学者からの仏説批判を安慧に対して改めて投げかけるのは、洋学者の問題提起への安慧の答えが不十分であると言いたいからであろう。とりわけ「極下ニ到ルコトヲ得ハ、須弥界ヲ見ルヘシ」という安慧の反論が、北

極中心の天文現象を須弥中心の現象に解消しようとしているのに対し、介石は、日月衆星が北極を中心に廻るといふ西説等の主張を、仏説としても積極的に説明することが重要であると考ええる。もちろん、介石は須弥界説を捨てるわけではない。しかし、『須彌儀記』で介石は、「人目ノ見成ストコロニヨラハ」と限定付きであるが、「我佛者モ亦：彼西洋及和漢ノ諸曆者ノ如ク北極中心ヲ言サルコトヲ得ス」「二〇丁裏」と言い、「彼此二説並用ヒテ可ナリ」「二一丁表」とも言う。日月衆星が北極を中心に廻るといふ西説や中国天文学などの主張に対する介石の肯定的な姿勢は明白である。

しかも、介石の北極天に対する肯定は、「人目ノ見成ストコロ」という限定を越えているように思われる。介石の仏教天文地理説は、二期に分かれる。前期の代表的著作は、文久二年（一八六二年）の『鍾地球説略』（『日本鍾』）である。『日本鍾』は、須弥について一言も語らず、「中華ノ周已前ノ聖説」「五三丁表」即ち蓋天説が説く北極を天地の中心に置く平天平地の世界を象とし、熊本や京都などそれぞれの地の視象の天地との間に、「視實両象ノ理」を適用している。介石の

### 【二二丁表】

I・マテモ毎夜現ニ見ル處ニテ、日月衆星委ク北極

前期天文地理説は、日月衆星が北極を中心に廻る姿を、世界の象と考えていたのである（前回注釈、四頁、「視實等象儀傍面圖」参照）。

後期の代表的な著作は、明治十三年（一八八〇年）の「視實等象儀詳説」である。『詳説』は、須弥中心と北極中心との二重構造を实在世界に導入する。その巻之上は、「北極中心ト須弥中心共ニ各視實両象有」と断った上で、「北極ヲ天地ノ中心トシテ視實両象ヲ立ルトコロノ理ヲ弁」じている（八丁裏以下）。巻之下は、須弥山が存在する証拠を列挙した上で、十一丁裏から「須弥四洲ノ天象ニ於テモ亦、視實両象有」ことを述べ、南洲の地上からは北極中心と須弥中心とが合して見え、須弥四洲を廻る日月の軌道（天）が、地に出没しながら北極を中心に廻る様に見える」と説明している。このように、後期においても、介石の北極天に対する肯定的な姿勢は、「人目ノ見成ストコロ」という制限を一部で越えているのである（前回注釈、四頁、「須彌四洲ノ天ト北極ノ天ト同一ノ天象ニ見成ス圖」参照）。

ヲ中心トシテ旋ル事ハカリハ、千載不レ可レ易。サスレハ、  
 佛説ノ如ク須弥ヲ中心トシテ日月カ旋ルトシテハ、  
 世人現ニミル處ニ合ス。其故ハイカ、ソト云ニ、圖ノ如ク、  
 V・須弥中心ハ日本ノ京師ヲ去ル事凡ソ百六



十〇万二千六百六十一里余。『立世論』ニ、内路ノ須弥ノ  
 中心ヲ相距ル里数ヲ二十四万  
 ○四百由旬トス。コノ一由旬ヲ以テ  
 印度ノ四十里トシ、是ヲ日本  
 X・ノ三十六丁ノ里法テ約シテ  
 算ヲ□□□□□□□□□□  
 北極ハ 「周極ハ北極ヲ去ル事  
 一度余リナレハ正極ニ見ス」 日本京ヲ去事

《字句注》

四行「合ス」ニ「あわず」と読む。

六行「須彌儀記」

すると、空欄には「布ク、是レ大概ヲ以示ス」が入る。

に従つて、「里」を補つた。六行「一」行「須彌儀記」

一「二」行「割注部分が、底本は「是極星ハ極處ヲ去ル事日本京師ヲ去ル事一度余リナレハ正極ニ見ス」となつ

では、この部分は割注。一行「須彌儀記」を参照

ているが、この中の「日本京ヲ去事」を本文に移した。

《解説》

四行「一二丁裏七行」この部分も、『須彌儀記』の「蘭曆

れる。次に、一二丁裏一行「七行」において、前者は後者の千

家ノ疑」の続きに相当する。まず、一二丁表五行「裏一行」  
 おいて、日本の京都を基準として須弥と北極のそれぞれの位  
 置を計算し、須弥と北極との位置が大きく異なることが示さ

倍以上も離れているから、須弥を北極と見なしたり、須弥を  
 中心として旋る日月衆星を北極を中心として旋るようになら  
 ずことはできないという洋学者による仏説批判が語られる。

『須彌儀記』からも、対応箇所を引いておこう。なお、『須彌儀記』には、「北極ヲ中心トスル日月ノ旋リト須弥ヲ中心トスル日月ノ旋リト相同カラサルノ圖」(下図。以下「儀記五丁図」と呼ぶ)が付けられている。

何トナレハ圖「儀記五丁図」ノ如ク、須弥ノ中心ハコノ

日本ノ京師ヲ相距ルコト、我邦ノ里法ニテ凡ソ百六十萬二千三百里餘ナリ

「立世」所説ノ内路ノ須弥ノ里數ニ千四百四十里トスルニ  
トスルハカニテ北極ハコノ京師ヲ相距ルコト千六百五十里餘

ナリ。因テ北極ノ天ハ須弥ノ中心ニ比スルニ、千有餘倍後ニアリ。須弥ノ中心ハ北極ノ天ヨリ千有餘倍先ニア

リ。五倍ヤ十倍ノコトナラハ、先ヲ以後ニ見成ヘキ理

モアレト、千有餘倍先ニアルトコロノ須弥ノ中心ヲ以如何ソ千有餘倍後ニアルトコロノ北極ノ天ト等見成サ

レルヤ。若シコノ一箇ノ疑ヲ以テ廣ク釋迦一代ノ教ニ推シ及サハ、何レノ説トシテカ亦妄誕ノ誦ヲ避ヘカラス。

〔四丁裏〜五丁裏〕

北極ヲ中心トスル日月ノ

旋リト須弥ヲ中心トスル

日月ノ旋リト相同カ

ラサルノ圖



五丁裏

四行「圖」 「圖ノ如ク」以下は、「日月衆星北極ヲ中心トスル圖」ではなく、『須彌儀記』の儀記五丁図を説明している。

儀記五丁図で、最も外側の大きな円が「須弥ヲ中心トスル日月ノ旋リ」である。その円の下部内側に日本が描かれ、日本の北側に小さな円と北極とがあり、さらに北の方(内の方)に「須弥中心」が描かれている。里数は書かれていないが、「日本ト須弥ノ中心ト相去ノ間」、「日本ト北極ト相去ノ間」が記されている。

五行・六行 「日本ノ京師」から須弥中心までの距離「凡ソ百六十〇万二千六百六十里余」が示される。『須彌儀記』は、それを「我邦ノ里法ニテ凡ソ百六十萬二千三百里餘」とし、『閩中案』の言う距離とほぼ合致する。『閩中案』の「凡ソ百六十〇万二千六百六十里余」も日本里数である。

六行（一）行 六行の「立世論」二から一一行は、『須彌儀記』該当部分が割注であることから、底本の原本も割注であつて、「日本ノ京師」から須弥中心までの日本里数「凡ソ百六十〇万二千六百六十里余」の計算を説明したものである。

『立世論』（『仏説立世阿毘曇論』）「日月行品」によれば、太陽は、われわれが住む南剌浮提（閩浮提）や、須弥山を挟んで反対側にある北鬱單越などの四大洲の上を、わずかばかり南北に偏りつつ須弥山の中腹の高さを回る。「内路」は、最も北に（須弥山側に）偏した太陽の位置を繋いだ円である。四季が四大洲に同時にめぐるといふ四洲同四時説は、内路を夏至の太陽軌道と見なす。また、南洲において内路は地球説の夏至線に対応する。他方、一年で最も南に偏した時の太陽の位置を繋ぐと外路となり、南洲においては地球説の冬至線に対応する。『閩中案』も『須彌儀記』も、ここでは内路についてのみ語っているから、儀記五丁図の外側の大

きな円は内路と考えてよい。「日月行品」には、内路の直径四十八万八百由旬とあるので、その半径「二十四万〇四百由旬」を「内路ノ須弥ノ中心ヲ相距ル里数」としている。

「由旬」（踰繕那）は、古代印度の里法単位 Yojanam の音訳である。『閩中案』は、「二十四万四百由旬」を日本の里数に換算しようとしている。「印度ノ四十里」とあるが、中国の「四十里」であろう。すなわち、印度の一由旬がまず中国の四十里に換算される。次に、それが日本の「里」に換算される。種々の日本里法の中で、三六丁（約4km）を一里とする里法を基準に取る。中国の一里を約500mとすれば、印度の一由旬は日本里法の約五里（ $\parallel 40 \times (500 \sim 4000)$  里）に当たる。すると、須弥中心から内路まで「二十四万四百由旬」は、百二十万二千里となる。また、『須彌儀記』の割注「一由旬ヲ我邦ノ里法六里ニ約シ」によれば、須弥中心から内路までは、百四十四万二千四百里となる。

しかし、『閩中案』も『須彌儀記』も、換算結果の数値を明記していない。また、須弥心から京師まで「百六十〇万二千六百六十一里余」を得るには、さらに南洲内路から京師までの距離が必要だが、それにも触れていない。さらに、右に換算した須弥心から内路まで百二十万二千里あるいは百四十四万二千四百里は、須弥中心から京師まで「凡ソ



百六十〇万二千六百六十一里一余」より小さく、儀記五丁図

と整合的でない。

【二二丁裏】

I・凡千六百五十里余リナリ。サスレハ、北極ハ須弥ノ中心ニ

北スヘキ千倍余リモ後ニアリ。五倍ヤ十倍トイヘトモ

中々大造ナ里程ナレハ、其先ニ有モノヲ後ニ見

ナスヘキ道理ナキニ、マシテ況ヤ千六百五十里

V・ヲ以テ千倍トシテ、其千倍余ノサキ一二有

須弥ノ中心ライカ、シテ千倍後ニアル北極ト

ヒトシク見ナサレルヤ。イカホト望遠鏡ノ玉ヨリモ

ヨク物影ヲウツス空氣カ十重百重ニカサナ

ルニセヨ、千六百五十里余ト申ス大造ナ里程カ

X・千倍余リモ隔タリテハ、須弥心ヲ以テ北極ノ

天ニ写シ来ル事ハナルマヒ。ソノ北極見界ハ南洲

一洲ノ星ナレハ窄狭ナリ。爾ルニ朗氣ノ物ヲ写スハ、

小ヲシテ大ナラ令ル事、出入ノ日月ノ如シ。サスレハ、

《解説》

一行 一二丁表一三行からここの一行において、「日本京」から北極までの距離が「凡千六百五十里余リ」であることが指摘される。計算方法は語られていないが、「日本京」における北極星で近似される天の北極の仰角（京都の緯度）が

三五度（北極下ノ地まで五五度）であること、そして緯度一度に二八里ないし三〇里の距離が対応することから、三〇×五五＝一六五〇と計算される。

この計算法は、経験的に知られるであろう。しかし、地が

球であり、北極星が限りなく遠くにあると仮定すれば、簡単に導かれる。逆に、この計算法の成功は、地球説の蓋然的証拠となる。地球説の「闇中案」がこの計算を行なうのは当然である。だが、仏教天文学者や蓋天説の天文家も、この計算法を使うことがある。ただ、平天平地説の仏教天文学者にとっては、問題の距離は、「日本京」から「北極下ノ地」までの地上における距離であり、且つ「日本京」の天頂から北極星までの天における距離でもある。

介石の『日本鍾』はこの方法を使い、「北極星ハ、日本ノ京師ノ天頂ヲ去ルコト千六百五十里辭ナリ。」「四九丁裏」と言う。しかも、『日本鍾』は介石天文地理説前期の著作であり、北極中心の世界を象とする。「京師ノ天頂」から「北極星」まで「千六百五十里」も、実象における距離である。それに対し、「我頂キヲ去ルコト僅カ一二丁程ニ近ク視成」される姿が、北極星の視象である「四九丁裏」。ところが、介石は、明治一〇年八月出版の『視實等象儀記初編』において、この方法を「曆学者ノ曆法ノ」計算に過ぎず、「北極直下ノ地マデ実ハ三千里トモ五千里トモ計リ知ルヘカラス。恐クハ万里以上ニ過キタルヘシ」一一「丁表裏」と言う。介石は、明治一〇年八月以前に考えを改め、実象の北極を万里遠くに移している。

『闇中案』は、前回注釈で述べたように、「視實等象儀記初編」より後、明治一〇年秋以降の執筆である。だから、『闇中案』の介石は、「日本京」から北極までの距離を「凡千六百五十里余リ」とする計算を、洋学者の計算と考えているものと推測される。

一行〱七行 洋学者による仏説批判の結論が述べられる。仏説に従えば須弥中心は京都から凡そ「百六十〇万二千六百六十一里余」であるが、西説などの方法によれば北極は京都から凡そ「千六百五十里余」、このように須弥中心は北極の千倍も離れているから、「須弥ノ中心ヲ：北極トヒトシク見ナ」すことは決してできない。

七行〱一一行 洋学者のこの批判に、介石は、安慧の「円準之理」（気による視線屈折の仮説）に対する介石自身の批判を繋ぐ。「須弥ノ中心ヲ：北極トヒトシク見ナ」すということには、遠くの須弥の中心を近づけて北極とひとしく見なすという側面と、大きな須弥中心の天（軌道）を縮めて小さな北極中心の天（軌道）とひとしく見なすという側面とがある。安慧は「円準之理」に基づき、気の働きがこれら二側面を可能にすると言うが、介石は、どちらも気の働きによって説明することはできないと批判する。

最初の側面が、七行〱一一行で批判される。安慧は、『新

論」巻之下六丁表く九丁裏において、南洲を包む空気がレンズのように視線を屈折させ、真実には遠くにある日体の像を近くに写す（移す）。しかも、空気は幾層にも分かれ屈折効果が重なるため、われわれは日体の像を近く南洲の天に見ると、答えている。介石は、その安慧の答えを、「空氣カ十重百重ニカサナルニセヨ」、京都から須弥中心までは北極までの千倍も離れているから、「須弥心ヲ北極ノ天ニ写シ来ル事ハ」不可能であると批判している。

一 一行く一三丁表一行 次に介石は、気は、大きな須弥中心の天を縮小するどころか、逆に日出や日没の太陽が大きく見えるように拡大して見せる。だから、気の働きによって、広大な須弥中心の天を南洲の天と等しく見なすと説明するのであれば、南洲の天の広さ（「天度」）では到底足るはずがないと言う。

「北極見界」とは、北極星を中心として廻り、地に出没することのない星ぼしの領域を指す。『天経或問』「序圖」に「北極紫微垣見界星圖」がある、それが「北極見界」であろう。介石の「儀記五丁図」では、小さな円が囲む領域である。介石は、「ソノ北極見界ハ南洲一洲ノ星」である、つまり「北

【一三丁表】

極見界」の星ぼしは、狭い南洲の天に属するだけで、他の三洲を廻ることはないと言う。それに対して、日月や二八宿の星座は四洲を廻り、広大な須弥中心の天（「儀記五丁図」の大きな円）に属している。

なお、介石は、「北極見界ハ南洲一洲ノ星」とすることで、実象の天を、北極中心天（北極星を中心として廻り、地に出没することのない星ぼし）と須弥中心天（日月や二八宿の星座、五曜など地に出没する天体）とに分け、実在世界に二重構造を導き入れている。先に触れたように、実在世界の二重構造は、介石天文地理説の後期に特徴的な考えである。『閻中案』には、その後期に特徴的な考えが含まれている。さらに、実在世界に二重構造を導き入れることによって、北極中心天が二面的になる。北極中心天は、北極星を中心として廻り、地に出没することのない星ぼしからなるものとしては、つまり「北極見界ハ南洲一洲ノ星」という点においては、実象、実在世界に属す。しかし、北極は、視象すなわち見成しにおいては、日月や二八宿の星座の廻りの中心でもある。北極中心天のこの二面性も、後期に特徴的である。

I・天度ノ足筭テナヒ。四洲ニ亘ル廣大ノ須弥心ヲ以テ、朗氣カイカ、一シテ南洲ノミノ北極ノ天ノ處ニ狹ク窄シムル。

「第二難 昇降遲疾」ト云ヨリ、十二昏右至ル。

V・駁シテ曰、コノ中六失アリ。一ニハ道理不廣ノ失、二ニハ眞像

誤レ目失、三ニハ日无<sub>二</sub>照熟<sub>一</sub>失、四ニハ氣風混同ノ失、

五ニハ不見日出ノ失、六ニハ犯遭他殺ノ失。先初ニ道理

不廣ノ失トハ、地球ノ説ニテハ圖ノ如ク日ノ出ノ日

地心ヲ去ル事九十度、日中ノ日モ又同シ。如是日ノ

X・出モ五ツ時モ四ツ時モ日中モ距<sub>レ</sub>地里数相シケレハ、一

時コトニ三十度ツ、替ヘテ昇降リスルトコロノ

道理ヨク聞ヘタレトモ、佛家ニテハ日ノ出ノ天距地

ノ里数ハ三十六万〇八百七由旬ナリ。一日中ノ一日ノ距地ノ里数ハ

《字句注》

六行「照熟」：火や太陽の「照用」（光り照らす働き）、「熟用」

（生き物や物事を熟させる働き）。仏典に「日光<sub>ハレテ</sub>離<sub>レ</sub>暗<sub>ヲ</sub>照用

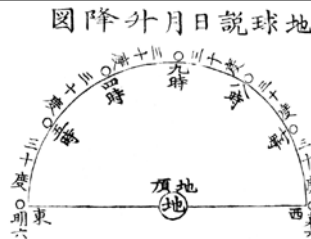
分明<sub>ナリ</sub>」（「阿毘達磨順正理論」）、「地能<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>持用<sub>ヲ</sub>」…、火能<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>。

《解説》

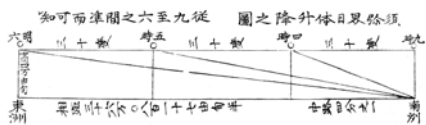
一行く三行 介石は、洋学者からの批判を安慧に投げ返し、

また安慧の「円準之理」を批判した上で、その結論として、「四

洲ニ亘ル廣大ノ順弥心ヲ以テ、朗氣カイカ、一シテ南洲ノ



[[「新論」卷之下五丁表]]



[[「新論」卷之下五丁裏]]

二熟用、…」（「俱舍論頌疏」）などとある。

次の十三丁裏の図。 一行「三十度」…一三丁裏の

図に従って、「三十六度」を改めた。

八行「圖」…

ミノ北極ノ天ノ處ニ狭ク窄シムル<sub>シホマヲ</sub>」

「窄シムル<sub>シホマヲ</sub>」は洋学者の疑問に應え得るもの

ではないという、「円準之理」への批判である。しかし、「朗

氣」を取り去れば、「四洲ニ巨ル廣大ノ須弥心ヲ以テ、イカ、  
 「シ」テ南洲ノミノ北極ノ天ノ處ニ狭ク窄シムル」という問  
 いは、仏教天文学の中心的問題として残る。しかも、敢えて「南  
 洲ノミノ北極ノ天」と述べているように、問題の介石による  
 定式である。介石は、二重化した「四洲ニ巨ル廣大ノ須弥心」  
 と「北極ノ天」とを、「視實兩象ノ理」によって繋なごうと  
 している。介石は、この一文で、安慧を批判し、同時に後期  
 の自らの新しい課題を提示している。

**四行** 洋学者からの第二の論難、「第二難 昇降遅疾」が  
 取り上げられる。安慧は、『新論』巻之下四丁裏から六丁表で、  
 日体昇降（日出から日没までの太陽運行）についての地球説  
 と須弥界説の理解を示す図（「地球説日月升降図」前頁転載、  
 「須弥界日体升降之圖」前頁転載）を掲載して、論難を紹介  
 している。

仏説によれば、日月は、半径約二四万四百由旬の軌道を地  
 に平行に日々周回している。「須弥界日体升降之圖」にある  
 ように、南洲日出（明六、午前六時ごろ）の太陽は、南洲か  
 ら三六万余由旬（中路の周の四分の一）離れた東洲にあり、  
 五時、四時と南洲に近づき、南洲正午（九時）には南洲天  
 頂に来る。この図に描かれていないが、南洲日没には、太陽  
 は西洲上に至る。しかし、洋学者は、この説明は観測事実

合わないと批判する。というのも、仏説を仮定して南洲から  
 太陽を観測するとすれば、特に日出から五時まで、また七時  
 から日没までは、太陽は遙か遠くを地に平行に運行しているか  
 ら、太陽の仰角の変化（昇降変化）は小さく、太陽は止まっ  
 て見えるだろう。ところが、実際の観測では、「地球説日月  
 升降図」が示すように、明け六時から五、五から四、四から  
 正午までの各一時（約二時間）に太陽は三〇度ずつ昇り、そ  
 の後も三〇度ずつ降りていく。太陽昇降の角運動に遅疾の変  
 化は見られないと洋学者は言う。

安慧は、『新論』下巻一二丁表にかけて、「第二難昇降遅疾」  
 に反論している。南洲を覆う氣（別風輪）が、太陽を見る視  
 線を屈折させ、太陽の像を真の太陽よりも高く浮かべ南洲近  
 くに写すため、われわれはその像を西説が主張する円軌道上  
 に見ることになると、「円準之理」によって安慧は答える。  
 その様子を、「南洲朝五時日体所在圖」（次頁転載）、「南洲四  
 時日体所在圖」（前回注釈三〇頁転載）に描いている。

**五行く七行** 介石は、安慧の反論に、六個の「失」を指摘  
 し、安慧の「円準之理」を批判する。

**七行く一二行** その第一、「道理不廣ノ失」が、一三丁表  
 七行から一四丁表一二行に亘って指摘される。まずここ七行  
 一二行で、介石は、地球説の方に道理があると言う。先の

「地球説日月升降図」の左半分の「圖」「八行」を十三丁裏に示して、地球説は日出も日中正午も太陽が「地心ヲ去ル」里数を「九十度」で常に等しい（とくに「相シ」）と考えるから、太陽

が一時毎に三〇度の一樣な昇降運動をするということをもく説明できると言う。（「九十度」の理解が難しいが、半径の長さを意味するのであろう。）

【二三丁裏】

I・四万由旬ナリ。サスレハ日中ノ日ノ距地ノ里数ト日ノ出

ノ日ノ距地ノ理数トハ九倍ホトノ遠近ノ差ヒアレハ、汝カイヘル如ク地上ノ朗氣ノカラノミニニテ日

V・出ノ日ト日中ノ日ト同シ弦リ

合ヒニ昇降スル道理カ有マヒ。

モシ汝タ、空氣一ツノカラ

ノミニニテ日ノ出ノ日ト日中ノ日ト

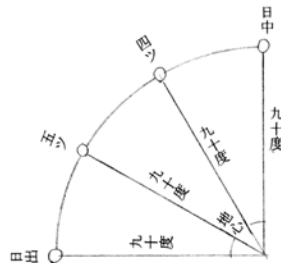
同シ弦リ合ニ見上ル多クハ、二難

X・アリ。一ニハ遠鏡无用ノ難、二ニハ遠鏡相例ノ難。先初二

遠鏡无用ノ難トハ、モシタ、氣一ツノカラニテ三十六万

余由旬先ノ日ヲ写シ来テ、近ク四万由旬ノ處ニ見セ

ルモノナレハ、空氣ニハ遠キヲ近ク見スル用アリ。サスレハ

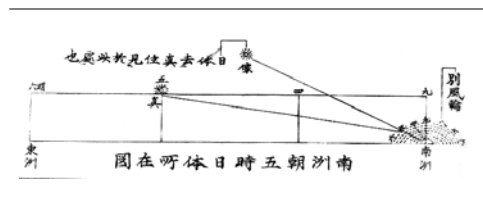


《字句注》

九行「多クハ」…「たくば」と読み、「見上げると言うので

あれば」と理解する。

《解説》



[[新論] 卷之下一一丁裏]

一三丁表一二行、裏六行。洋学者が指摘する仏説の困難を、介石は改めて指摘する。仏説では、「日ノ出ノ天距地ノ里数」(日出の太陽が位置する「天」から観測者の南洲の「地」までの「里数」、横方向に三六万〇八百七由旬)と「日中ノ日ノ距地ノ里数」(正午の太陽から観測者までの距離、縦方向に四万由旬)とは、九倍の差がある。このように、横縦九倍以上の差があれば、気の屈折作用だけによって一様な太陽の昇降運動が観察されるということは不可能であり、安慧の説明には道理がないと批判している。

#### 【二四丁表】

I・世ニ望遠鏡ナトノ目鏡ハ无用ノモノナルヘシ。ソレテハ恐ク老人ヤ近眼ノモノトモカ□フコトモ有フ。二ニ遠鏡相例ノ難トハ、ソレ望遠鏡ノ物ヲ見スルハ小ヲシテ大ナラ令ル事能フ。コレニ相例スレハ汝カイ

V・ヘル處ノ空氣ハ、三十六万由旬ホトノ大造ナリ。遠方ノ日ヲシテ近ク四万由旬ノ天ニ浮ベ来ル能アラハ、

相<sup>スル</sup>例<sup>スル</sup>之<sup>スル</sup>佛家ノ日月ハ二千里ノ大サナレハ、氣カ写ス

事ハ倍<sup>シテ</sup>之<sup>シテ</sup>四千里ノ大サニ見セルモノナラン。爾ル二日月

ノ形ハ七八寸ホトノ小物ニ見ル事ナレハ、遠キモノ

X・ヲ近ク見ナシ高キヲ卑クキ視ナシ大ヲ小二視ナス

七行、一〇行。それでも、安慧が気的作用だけによって一様な太陽の昇降運動が観察されると主張するならば、その安慧の主張に二つの難点を指摘できると介石は言う。

一〇行、二四丁表二行。一は「遠鏡无用ノ難」。もし、気のみ働きのよって、三六万由旬先の遠くにあるものを近く四万由旬のところ写すことができるならば、望遠鏡などは無用であり、遠視の老人や近眼の者も喜ぶだろうが、そのようなことはないという。

視実ノ事ハ、タ、氣ノ所為ノミトシテハ大二相

濟サル所ナリヤ。中上六道理不廣 二二眞像ノ目誤ノ失トハ、

其「像」ト申ス文字本ト「像」ニ「カタチ」ト訓セリ。

「実字」  
「実字」

### 《字句注》

一行「目鏡」…「目鏡」は、望遠鏡の接眼レンズや眼鏡（のレンズ）などのこと。

ハズ」と否定であるが、論旨に沿って肯定に改めた。

二行「□フ」…一字空所に「喜」を補う。

「二行」「眞像ノ目」…「目」は「眼」すなわち「字眼」であろう。つまり、「眞像」が安慧の主張の理解を左右する最も重要な文字（キーワード）であるということ。

三行「相例」…漢訳仏典の中でしばしば用いられているが、今日の言い方では、「比較」「比例」「類推」等に当たるであろう。

四行「能フ」…底本は「…能

### 《解説》

二行「二行」 介石が指摘する難点の二は、「遠鏡相例ノ難」である。望遠鏡は、小さなものを大きく見せることができる。その望遠鏡と「相例」（比例）させて考えれば、安

き（視大小）と矛盾する。（なお、望遠鏡の像は、実物ではなく肉眼に見える像を拡大するだけであるから、介石の望遠鏡との相例は正確でない。）

慧の言う気は、三十六万由旬の距離を満たす大造りのものであり、また遠方の太陽を近く四万由旬の天に写す大きな効果を持つというのであるから、二千里の大きさの日月を、倍の四千里の大きさに見せることになろう。しかし、逆に、われわれは二千里の大きさの日月を七八寸ほどに見る。このように望遠鏡の働くと「相例」（比例）して考えると、気による視線の屈折についての安慧の仮説（「円準之理」）は、遠くの大きなものを小さく見るわれわれの実際の観測、見なしの働

さらに、介石は、日月などの観測において「遠キモノヲ近く見ナシ高キヲ卑クキ視ナシ大ヲ小ニ視ナス」視遠近、視高低、視大小などの視實の關係は、「タ、氣ノ所為ノミ」とするのではないと言う。ここまでが、洋学者からの「第二難昇降遲疾」への安慧の反論について、介石が指摘する六失の第一「道理不廣ノ失」の説明である。



## 【二四丁裏】

I・由テ「像」ノ字ハ、眞物カ別ニ有リテ、ソレニ<sup>(似カ)</sup>□セテ、或ハ石ヲ

キサミ金ヲ鑄、或ハ木ヲ彫リ画キテ、其形ヲ写ノ義故、

木像ト画像ト通用説ユヘ、画ノ事ト思ヘトモ、実ハ

爾ラス。然ルニ汝カ心ハ、鑄ルノ<sup>カタチ</sup>↓景ヲ写スカ如ク

V・空氣カ日月ノ影ヲ写ス故、「像」ノ字ヲ以テ「影」ノ

意ニ用ヒタレトモ、コレハ誤リナリ。○三ニハ日無<sup>ニ</sup>照<sup>ニ</sup>熟<sup>ニ</sup>失トハ、

ソレ画像ト申スモノハ実用ナキモノナリ。喩ヘハ鏡ノ中ニハ

火ノ影アリ水ノ影アレトモ、物ヲ燒キ物ヲ濕ス

叟ノ能ハサルカ如ク、汝カ眞日ト像日トニ二分テ

X・空氣ノ写シナル日月ヲ以テ影法ノ<sup>(像カ)</sup>□トスレハ、其

日体ニハ熟用モナク照用モナカルヘシ。依テ眞像ノ

名ニテハ義ニ於テ妨ケアレハ、介石先生ノ説ノ

如ク視実ノ名ヲ用ヒネハナラス。○四氣風混同

## 《字句注》

一行「□<sup>(似カ)</sup>セテ」：「似せて」と読む。 四行「↓」：「↓」

は、空所を「詰める」という記しで、後に本文に書き加えら

れた可能性が高い。 一〇行「影法ノ□」：空所に「像」

を補う。「影法」も仏教語であろう。「法」は物心は一切万有

を意味する。その内、「影」と呼ばれる法（もの）は、「実体

より生じて、実性なきもの」であるとされる（『補訂佛光大

辞典』）。

## 《解説》

十四丁表一二行、裏六行 六失の第二「眞像ノ目誤ノ失」が説明される。安慧は、介石の「視實」に代えて「眞像」という語を使い、ものの実態を「眞象」、気によるその像を「像象」と呼ぶ。介石は、その「眞像」が安慧説の「目」(字眼、キークワード)であるが、「像」の字義理解が誤っていると云う。介石によれば、「像」は「かたち」と訓み、「眞物」の「形ヲ写ノ義」を持つ。安慧は、「画」の事を言っているようでもあるが、そうではなく「像」(かたち)を「景」(かた)即ち「影」と理解しており、そこに安慧の誤りがあると、介石は言う。

介石は、漢学の研鑽を積み、『助字彙』『虚字彙』『実字彙』を著したと言われる(仁藤巨寛『等象斎介石上人略伝』)。「助字彙」は、吉川幸次郎他編『漢語文典叢書』第二巻に収められている。『説文解字』などを参照しつつ、「體ト用ト及ヒ和訓トノ三ヲ分テ」「二丁表」、助辞の字義について独自の解釈・分析を行っている。「體」は偏や傍の字形と組み合わせ、

## 【二五丁表】

I・失トハ、已ニ氣ト風トノ事ハ安恵トイヘル人ニ与ヘタル  
書ノ中ニ弁シ置タレトモ、世ニハ未タ見サル人モ有ルト見  
ヘテ、今コノ書ノ中ニ氣ト風トヲ誤リ混セリ。由テ

「用」は「裁断」「連体」などの用字法や借用、通用などを指す。ただし、ここ『闇中案』では、語の指示対象の働き、機能としての「用」にたびたび言及している。なお、江戸後期の豊後日田郡の儒学者・漢詩人広瀬旭莊が『助字彙』に好意的な序を寄せている。

六行、一三行 介石は、第三の「日無照熟失」を指摘する。われわれに見える太陽が安慧の「像象」(影)に過ぎないならば、熟用や照用などの実性を欠くはずである。しかし、われわれが見る太陽は熟用や照用を持つ。よって、安慧は「日無照熟失」に陥っている。「眞像」に代えて、介石の用語「視實」を用いるべきであると、介石は言う。

一三行 一六丁表一一行にかけて、介石は「氣ト風ト別ナル八ツノ証」を挙げ、「第二難 昇降遲疾」に対する安慧の反論に、六失の第四「氣風混同ノ失」が見られると批判していく。

重テ其別ヲ弁セシ。汝カ仇ニハ『氣海カンラン』ニヨルニ、

V・金銀ノ如ク其質堅蜜ナル、コレ氣ノ往來スルノ

義アリテ、氣ソノ金銀ノ質中ニ往來スルトイヘリ。

サスレハ氣ハトキトシテ□<sup>(尾カ)</sup>ラサル事ナク、モノトシテ盈サルソナシ。

風返レ之、時トシテ起ラサル事アリ。金銀等ノ如キ堅キ

質ノトキ、入ル、事不能。若シ氣ト風ト別ナクハ、何

X・故氣カ恒ニ起リ、一風一時トシテ絶ルヘキヤ。又氣ハ金銀ノ

如キ堅質ノ中ニ往來シ、風ハ戸ヤ障子ノ脆質

ナルモノサヘ隔スレハ、其内ニ入ル事能ハズ。焉ソ風ハ

金銀ナトノ堅質ノ中ニ往來スルヲ得ン。氣ハ恒

### 《字句注》

五行「往」・六行「往」・「往」も用いられている。

七行「□<sup>(尾カ)</sup>ラサル」ニ空所に「起」を補う。八行「返レ之」・「之

### 《解説》

一行「三行 介石は、「氣ト風トノ事」について一書を安

慧に「与ヘタ」のに読んでいないようだ、「コノ書」は今な

お「氣ト風トヲ誤リ」混同していると言う。介石が安慧に「与

ヘタル書」として、『世益新聞』第二號(明治八年三月)掲

載の佐田拾穂(介石)の論說「西洋ノ說氣ト風トヲ混シ誤レ

ルヲ駁スル事」が考えられる。他に、「今世ノ洋学者」たち

の地球大氣(雰圍)説を批判した『雰圍論』も考えられる。

に反して」。 一行「脆質」・判読が難しいが、「堅」と

の対比で「脆」とした(「堅脆」は、かたいことともいこと)。

内容を見ると、後者は地球大氣説の系統的批判だが、前者

は専ら「氣ト風トノ」混同を、「氣ト風トハ凡ソ十個ノ異アリ」

と言いつつ指摘している。『闇中案』の現在の箇所では、「氣

ト風ト別ナル」「八ツノ証」を挙げて、「氣風混同」を指摘す

る。数が違うが、内容も言葉使いも、『世益』二號論説と一

致している。

執筆・刊行年を比較すると、『世益』二號は明治八年発行

である。他方、『雰圍論』には、執筆・刊行年がない。だが、文中に「東京ト他縣下トハ：」「一丁表」とあるから、明治四年廢藩置県以後の執筆である。さらに、弟子仁藤巨寛の『等象齋介石上人略伝』は、介石の天文地理書を執筆・刊行年順に列举し、明治九年の「須弥地球孰妄論」に触れた後、「其後佛教創世論、視実等象儀詳説、雰圍論等を著はして：」と述べている「七丁裏ハ八丁表」。『雰圍論』は、明治一三年の『視実等象儀詳説』と同時にその後の刊行であろう。ところで、本文三行の「コノ書」は、介石が今批判している慶応三年の『護法新論』ではなく、批判のきっかけを作った明治一〇年の『日本鎚質問』であろう。介石はそれを見て、「与ヘタル書」を読んでいないと言っているわけだから、介石が安慧に「与ヘタル書」は明治一〇年の「コノ書」よりも前である。執筆・刊行の時期からも、「与ヘタル書」は、『世益』二號論説かその草稿である可能性が高い。

三行ハ一五丁裏四行 まず、「氣ト風ト別ナル一ツノ証」が示される。即ち、氣は「トキトシテ起ラサル事ナク」恒に生起しているが、風は「時トシテ起ラサル事アリ」ということである。『世益』二號論説は、「六二ハ氣ト風トハ恒起断起ノ別アリ」としている。

「二ツノ証」は、氣は堅質の金銀をはじめ物体の内部を含む

あらゆる空間を満たすが、風は障子などの柔らかいものによつても遮られるということ。『世益』二號論説は、「一二両質粗細ノ異アリ。風ノ質ハ粗ナルユヘ戸ヤ障子ヲ以テ之ヲ防クトキハソノ内ニ入ラス。：物トシテ氣往来セザルハナシ。金ノ如キ密質ノモノナレトモ氣孔アリテ氣ハソノ金中ニ往来ス。是レ氣ノ質ハ極細ナルユヘナリ」と述べている。

介石は、特に「二ツノ証」のために、蘭学者青地林宗が蘭語自然科学書から訳述した「氣海觀瀾」（文政一〇年刊）を引いている。その「體性」「氣孔」「氣性」の節によれば、物体はそれ以上分析できない無数の「極微」から構成されるが、たとえ金銀のように緻密な物体であっても、その「極微」は互いに固着してしまわず、間には必ず「氣孔」があつて、微細で流動質の氣がそれらの「氣孔」に入っていくと云う。

ところで、『氣海觀瀾』を活用するのはむしろ安慧の方である。安慧は、自らの「円準之理」のために、『氣海觀瀾』から、「氣海」（宇宙空間）と「雰圍」（地球大氣）の性状、大氣による光線の屈折などを参照している。また、『氣海觀瀾』「風」の節から「氣之汎流、此謂之風」。氣之與レ風、猶二湖之與レ川。（氣の汎流は、ここに之を風と謂う。氣と風とは、湖と川のごとし）「二十丁裏」を引き、「風ハ即チ氣也」という円通に賛同している。「新論」卷之上「一五丁裏、卷之

下一〇丁裏」。その安慧に対して、介石が『氣海觀瀾』をわ

ざわざ「汝カ仇」すなわち安慧の論争相手として引いている。

【十五丁裏】

I・起り、風ハ時トシテ絶ユ。是氣ト風ト別ナル一ツノ証ナリ。

又氣ハ金銀等ノ堅質ノ中ニ往来シ、風ハ戸ヤ

障子ノ如キ脆質サヘ越吏トアタハス。是レ氣ト

風ト別ナル二ツノ証ナリ。又空氣ノ中ニ燈焰少モ動ス

V・直ス。風中ニハ燈焰動揺シテ直升スル事能ハス。

コレ氣静ニシテ風ハ騷シク、爾レハ氣ノ質ハ濕潤ナルモノ、

風ノ体ハ乾燥スルモノ。是氣ト風ト別ナル四ノ証ナリ。

又氣ハ重ク、風ハ軽キナリ。是氣ト風ト別ナル五ノ

証ナリ。氣ハ遅緩ナリ、風ハ疾捷ナリ。是氣ト風ト

X・別ナル六証ナリ。又氣ハ直升ス、風ハ横行ス。由テ氣

ト風トハ横豎ノ別アリ。蠡ハ横行シ化龍ノ直升

スル如ク、元来横豎異アリ。是ハ氣ト風ト別ナル

七ツノ証ナリ。又氣ト風トハ、文字モコロリト別ナリ。

《字句注》

六行「騷」「濕潤」、七行「乾」、二行「元来横豎異アリ」

など。 二行「化龍」…黄河中流の荒波を登り切った

『世益』二號論説に従つて改めた。 二行「蠡ハ」…底

魚は龍と化して天に昇るといふ「三秦記」の伝説上の生き物。

本の「喩へハ」を改めた「蠡」は、かたつむり、なめくじ

## 《解説》

四行く六行 「三ツノ証」が落ちてゐる。四行「又空氣ノ

中ニ」から六行「風ハ騒シク、爾レハ」までが、「三ツノ証」

の説明と思われる。原本では、「爾レハ」は「是レ」であつて、

「是レ氣ト風ト別ナル三ノ証ナリ。」と続いていたのであろう。

『世益』二號論説には、「四ニハ氣ト風トハ静騒ノ別アリ。…」

とある。

六行く三行 「氣ト風ト別ナル」「四証」「五証」「六証」「七

証」が挙げられる。『世益』二號論説では、「二ニハ氣ト風ト

ハ乾燥濕潤ノ別アリ」、「八ニ氣ト風トハ輕重ノ別アリ」、「七

ニハ氣ト風トハ遲疾ノ別アリ」、「三ニハ氣ト風トハ豎行横行

ノ別アリ」となつてゐる。

一三行 ここから一六丁表一三行まで、介石は、「氣」と「風」

の字形や対象の働きを挙げて、「氣」は「熟食ヨリ熱氣ノ升

ル」ことを意味し、「風」は「横に」輕クトビ動スル」こと

を意味すると言ふ。このように字義が全く異なることを、「氣

ト風ト別ナルハツノ証」とする。『世益』二號論説には、「十

ニハ氣ト風トハ文字ノ別アリ」とある。

なお、『世益』二號論説の「氣ト風ト」の「十個ノ異」の内、「五

ニハ氣ト風トハ有聲無聲ノ別アリ」と「九ニハ氣ト風トハ剛

柔ノ別アリ」が、『闇中案』に言われていない。

## 【二六丁表】

I・「氣」ノ字ハ

升ル形、米ハ食ナリ。故ニ熟食ヨリ熱氣ノ升ルヲ

氣ト云。「風」ノ字ハ収レ「虫」。「風」ハ「帆」ノ字一ノ「巾」一ヲ省キ、「虫」ハ

動ク義ヲトル。虫ハ愚ニシテ、人ノ如ク知有モノニ

V・アラス。タ、其動ク斗リテ、其虫ト云意ヲトレリ。

帆ハ輕クスルモノ故へ、其輕義ヲトル。由テ輕クトビ動

スルヲ「風」ノ義トス 介石先生「案」  
ノ中ニ悉ク記セリ 是氣ト風ト別ナルハツノ

証ナリ。如是氣風ハ水火ノ如ク元來別ナルモノヲ、混

メ下ス。是誤リナラスヤ。普門ハ隨機方便ノ為ニ正ク  
X・洋説ニ随フ。汝チ是ヲ知ラスシテ、実ニ爾リト思ヘリ。

惑ヘルニアラスヤ。○五ニハ不見日出ノ失トハ、同十一昏

十二昏ノ處ニ五時ト四時トノ日体處在ノ圖ヲアケ

タリ。コノ圖ニ准スレハ、日出ノ圖ハ今コ、ニ記ス處ノ圖ノ

《字句注》

七行『実字』…介石の著書『実字彙』を指す。

《解説》

八行「一一行 普門円通も安慧も洋説に随つて「氣風混同」に陥つていと、介石は批判している。ただし、円通が「風ハ即是氣ナリ」「須弥山儀銘並序和解」卷之下三丁表」と言うのは、「隨機方便」として相手の洋説に合わせているだけだが、安慧は円通の真意に気付かず、真実「風ハ即氣ナリ」「新論」卷之上十五丁裏」と思つて、西説に随つていと批判している。

一一行「一六丁裏二行 安慧は、洋学者の「第二難 昇降遅疾」に対し、氣の作用のため、われわれは眞の位置よりも高く浮かび上がった太陽の像を南洲近くに見るから、太陽が

九行「ノ」…合略仮名「して」。

一様な角速度で昇降するのを見ると答えていた。介石は、安慧のこの反論に、第五の「不見日出ノ失」を指摘する。もし安慧が言う通り氣が太陽の像を高く浮かべるならば、眞の太陽は常に四万由旬の高さに在るのだから、地平から昇る日出を見ることはない。安慧の「南洲朝五時日体所在圖」「十四頁參照」などに準ずれば、安慧の「南洲朝六時日体所在圖」「次頁転載」は一七丁表の図のように訂正すべきで、六<sup>ッ</sup>よりも幾らか過ぎた「六<sup>ッ</sup>半時」に、四と五の間に「竿ホトモ」高い所に、朝日が忽然と現れるのを見ることにならうと指摘している。

【一六丁裏】

I・如クナルヘシ。サスレハ日ノ出ノ日ヲ見ス。六半時ニ忽然ト

四五二竿ホトモ高キ地ヲ離レテ升ル日ヲ見ルヘシ。

○六二ハ犯遣他殺ノ失トハ、此中六昏ノ左ヨリ「漁夫蛋民ノ類」此ノ意ヲ得サレハ魚ヲ得ス」トイヘル、漁夫蛋

V・民ノ類ニ漁獵ノ伝授ヲ及フ。是ハ自ラ殺サストモ他ヲ

シテ殺サシムレハ、律部ニテハ「遣他殺ノ殺生罪」ト申シテ、

手ヅカラ殺スモ同罪ナリ。サスレハ是レ「護法」ト名ケ

乍ラ獵師ノ師ナレハ、是破法ナラスヤ。

△「第三難 日月横旋」ト云ヨリ、十六昏ノ左ノ初行至ル。

X・○駁シテ曰、コノ弁爾ラス。富士高シト云ヘトモ、其經一里ナレハ、

万里ノ大洋ニ比フレハ、万分ノ一ナリ。由テ其高下ノ

差ヒヲ測ルニ、卯ノ毛ホトモ違ヒナク、サスレハ富士ノ峯

ニテ日ノ出ヲ見ルモ、又大洋ニテ日ノ出ヲ見ルモ、何

《字句注》

一行「六半時」「六ツ半」は、「六ツ」と「五ツ」の中刻で、

春分であれば6時過ぎ。

三行「蛋民」…海辺や川岸に

住む人々。

《解説》

三行「八行 安慧は、『新論』卷之下六丁裏・七丁表で、

水面による光線の屈折（安慧にとつては視線の屈折）を説明

しながら、水面下の魚は本当の位置より浮き上がって見える

と、漁師に教えている。介石は、それを、「犯」遣「他殺」ノ失」

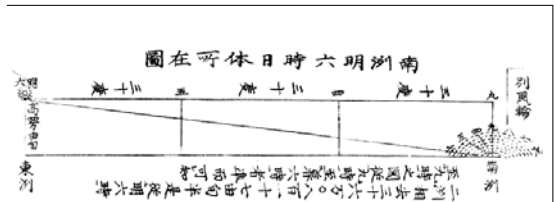
（他をして「魚を」殺せしむを犯すの失）だと非難している。

仏教は、他の者を唆して殺生させることも自らの行為である  
と戒めるが、介石の非難は言い過ぎだろう。

九行 洋学者からの「第三難 日月横旋」は、『新論』卷

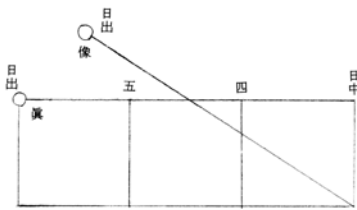
之下一二丁表裏に紹介されている。仏説は日月が平らな地に

平行に「横旋」すると説くが、それでは日月が「地平ヨリ出



[[「新論」卷之下一一丁表]





没スル」姿を説明できないという批判である。批判されているのは、平天平地説が含む基本的な困難である。この困難を解決するために、介石は「視實兩象ノ理」を工夫し、安慧は「円準之理」の仮説を立てたのであった。しかし、既に底本一六丁表一二行以降で介石が「五ニハ不見日出ノ失」として指摘していたように、安慧の「円準之理」は、地平線下にある太陽が地平線上に浮き上がって見えることを説明できても、地平線より高い太陽を地平線下に沈ませ、「地平ヨリ出没スル」ようにすることはできない。

この「第三難 日月横旋」に対して、安恵は、富士山頂から日出を見た人々の報告を自説の証拠として挙げる「十三丁

### 【一七丁表】

I・ノ違ヒカ是アラシ。爾ルニ大洋上ニテ日ノ出ヲ見ルニ、半輪イテ、半輪地下ニカクル、ヲ見ル。又

日ノ入ニハ半輪没シテ半輪イテ、半輪地下ニカクル、ヲ見ル、又大洋ニ如クハナシ。

V・天末ハ水天合一スレハ、地下ヨリ湧出シ地下ニ向フテ入ル姿タ、コトニ分明ナリ。コノ味ヒハ山中ノ人ハ知ラス。

【第四難 曜乗風輪】ト云ヨリ十七昏

表裏」。それは、太陽は予測していた日出の時刻よりも遅れて、いくらか高い空に突然現れたが、下界では辰の刻（午前八時）の太陽に見えるであろうというものである。安慧は、結局、観測事実として日月は「地平ヨリ出没スル」様に見えないと言っている。

一〇行〜一七丁表七行 介石は、富士山上からの報告に対し、「大洋」では日月が「地下」「海面下」ヨリ湧出シ地下ニ向フテ入ル姿タ、コトニ分明ナリ」と、海上からの観察報告を挙げて反論する。なお、熊本の港に住寺を持つ介石は、阿蘇に住寺を持つ安慧を指して、「コノ味ヒハ山中ノ人ハ知ラス」と言っている。

左五行ニ至ル。

X・駁シテ曰、コノ下評スルニ足ラス。

「第五難 出没方位」ト云ヨリ、二十二昏

左六行ニ至ル。

駁シテ曰、ソレ一班ヲミテ全豹ヲ知ル。予初一昏

《解説》

八行・九行 「第四難 曜乘風輪」は、『新論』卷之下一六丁裏にある。「曜」とは日月衆星、ここでは特に日月のことである。「惣風輪ニ乗シテ旋ル」日月を「別風輪」の内から観測するとすれば、「氣ハ浮軽…揺動」するから、日月の像も揺動し、日食月食の定則を得ることは困難となろうという、洋学者からの論難である。

安慧は、日月が「惣風輪ニ乗シテ旋ル」という点に関しては答えていない。「別風輪」との関連でのみ、「別風輪」は西説の地球大気と同じものだから、「別風輪」の内から観測しても、日月の運行に定則を得ることが可能であると反論している。「一六丁裏」一七丁裏。

一〇行 介石は「評スルニ足ラス」と言うだけである。

一行・一二行 洋学者からの「第五難 出没方位」は、

『新論』卷之下一七丁裏・一八丁表に紹介されている。仏説は、南洲日の出の太陽は、南洲から遙か東北に位置する東洲の上

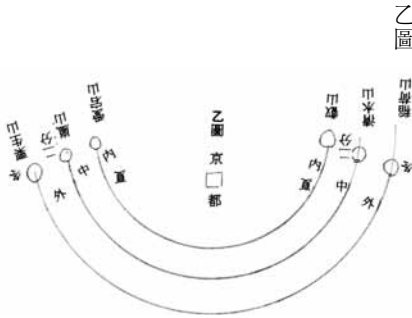
にあり、日没の太陽は、南洲から西北に位置する西洲の上にあると説く。だが、実際の観測では、日出の太陽、とりわけ冬至の日出の太陽は辰の方角（ほぼ東南東）に、日没の太陽は申の方角（ほぼ西南西）にある。仏説は実測と食い違っているという論難である。

安慧は、「日体ノ所在」と「風輪ノ所由」の二点で答える。「新論」卷之下一八丁表「二二丁裏」。前者について、「日月行日品」が「日すでに東弗婆提の中央を過ぎれば」と言い、中央に「在れば」と言っていないことを挙げて、南洲日出の太陽の位置は、一年を通じて東洲の中央を挟んで南北一八度の間を変動し、それが日出の太陽の方角の季節変化の元であると主張する。日没の太陽も西洲の中央を挟んで同様に変化すると言う。

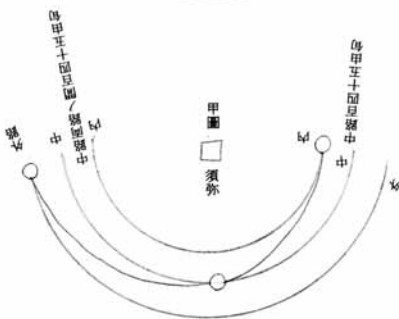
次に、安慧は、「別」風輪ノ所由、その視線屈折作用を指摘する。「第二難」「第三難」をめぐっては天地の縦方向の視線屈折であったが、ここ「第五難」では南北の横方向の屈

折である。別風輪による南北方向の視線屈折によって、北東方向にある日出の太陽も北西方向にある日没の太陽も、より南へと移って見えるのである。しかも、別風輪は季節とともに遊動し、「夏至：二八空氣南二倚ル「須弥から離れる」…；冬至：ハ、空氣北二倚ル「須弥に近づく」故」、夏至の時の屈折角よりも冬至の時の屈折角はるかに大きくなり、冬至の日出・日没の太陽はさらに南に偏るといふ（「南洲夏至出没方位圖」「卷之下二二丁表」参照。二九頁転載）。安慧は、

【一七丁裏】



甲圖



このようにして伝説と実測との食い違いを解消しようとする。

一三行 しかし、介石は、二〇丁裏一一行にかけて、環中や介石らの四洲同四時説と円通や信曉らの四洲異四時説との論争という視点から、太陽が観察される方位の季節変化についての安慧の説明も、結局異四時説に与するものと批判している。介石の批判は、明治一四年八月刊の介石著『日月行品台麓考』（『台麓考』と略）と内容が重なっている。

## 《解説》

甲圖 四洲異四時の考えを描いた甲圖と、同四時説の根拠となる乙圖とが示されている。『立世論』「日月行品」は、須弥山を中心に四大洲を廻る日月の軌道を定めるために、内、中、外の三路を立てる。内路の直径は四十八万八百由旬、内路から外路までは二百九十由旬、内路から中路まで、また中路から外路までは百四十五由旬である。甲圖には、須弥山を廻る三路の南半分が描かれている。

「日月行品」は、太陽の（恐らく）一日の運行と関係づけて、四大洲それぞれの昼夜の時間の長さを次のように説明している。

もし太陽が東弗婆提で内路を運行するなら西瞿耶尼で外路を運行し、南剌浮提と北鬱単越で中路を運行する。この時、東弗婆提では昼が最長すなわち十八牟休多、夜が最短すなわち十二牟休多となる。西瞿耶尼では夜が最長すなわち十八牟休多、昼が最短すなわち十二牟休多となる。剌浮提と北鬱単越では昼夜が等しくなり、ともに十五牟休多である。「訳は、林隆夫「立世阿比毘曇論日月行品訳注」に従った」

「牟休多」(Muhūta)は一昼夜を三十等分した印度の時間単位である。右引用では、太陽は東洲の北寄りの内路を行き、昼が最長で夜が最短だから、東洲は夏至であろう。東洲夏至のこの日、太陽は西洲の南寄りの外路を行き、昼が最短で夜が最長だから、西洲は冬至である。さらに、太陽は南洲と北洲の中路を行き、昼夜が等しいから、南洲は春分、北洲は秋分と思われる。太陽の一日の周回において、各四洲に夏春秋の異なる季節がある。このように、「日月行品」は四洲異四時説を述べているように思われる。

甲圖は、太陽が四洲異四時説に沿って周回するとしたときの、南洲春分における日出・日入・正午の太陽の位置を○で示している。南洲春分日出の太陽は、遙か東洲の天にあり、東洲夏至だから内路にある。日入の太陽は西洲上の外路（冬至の位置）にある。正午の太陽は南洲上の中路にある。これらの○を結んで引かれた曲線が、南洲春分における太陽の軌道である。太陽は、一日の間に、東洲内路、南洲中路、西洲外路、北洲中路と、三路を渡り行く。図の中央に軸を引いた時、太陽の軌道は左右対称ではない。

『台麓考』七丁裏に、甲圖とほぼ同じ「異四時南洲春分日出日没ノ圖」がある。底本の甲圖は、『台麓考』の図と少し異なり、

東洲上で太陽軌道が内路と中路との間に引かれているが、『台麓考』に従って修正した。

乙圖 乙圖は、京都で二至二分に実測される太陽出没の方向を描いている。乙圖と同じ図（西京ニテ二至二分ノ日ノ出没ヲ見ル圖）が、『台麓考』一二丁表にある。夏至には、東山の北・比叡山に日出を見、西山の北・愛宕山に日没を見る。冬至には、東山の南・稲荷山に日出を見、西山の南・粟

【二八丁表】

I・ヲ見テ全部護法ナラサル叟ヲ知ル。是ニ来テ果シテ

其徴アラハレタリ。其故云何ト云ニ、二十昏已下二出

没方位ノ三ヶノ圖ヲ出スモノ、是古来誤レル四（南か）異

四時ノ説ナリ。表ニ異四時ノ言ヲカクシテ、圖ヲ以テ

V・異四時ヲ顕ス。佛家ノ害是ヨリ甚タシキハナシ。以テ

責スンハ有ヘカラス。予曾テ介石先生ヨリ承ルニ、

異四時ノ説ニハ先生説ル處三十ヶノ難アリ。今其

三十ヶノ難ヲ挙テ其誤リヲタ、サン。先一二ハ、三路无

差ノ難。是ハ汝カ如ク須弥ノ四洲四時各々ナリト

X・云ハ、内路ト外路ト中路トノサ別カ立マヒ。何トナレハ、

且ク南洲春分如キ、日ノ出ニハ日体内路ニアリ、日中ニハ

日面ホト外へ張り出シテ中路ニ出ルト視ナシ、日ノ入ニハ

生山に日没を見る。春秋二分には、清水山に日出を、嵐山に日没を見る。北に出る太陽は北に没し、南に出る太陽は南に沈む。実測は、太陽は一日の周回で三路を渡り行くことはなく、夏至には内路を、冬至には外路を、二分には中路を行くと言う同四時説を支持する。乙圖の大陽の軌道は、中央の縦線に関して左右対称である。



[[新論]卷之下・二一丁表]

外路二有日カ百四十由旬ホト内ニ引込テ中路二入ト見

《字句注》

三行「四〇洲か異四時」…空所に「洲」を補う。 一一行「南

洲春分」…ここは「四洲四時各々ナリ」「九・一〇行」という異四時の解説なので、甲図との対応も考え、「四洲春分」を

《解説》

二行〇六行「南洲夏至出没方位圖」（前頁転載）等の「三ヶノ図」を見れば、安慧が異四時説に立つことは明らかだと、介石は言う。実際、「南洲夏至出没方位圖」は、南洲夏至の時北洲冬至とし、「南洲冬至出没方位圖」（略）は、南洲冬至の時北洲夏至としており、異四時説に立つと判断される。

だが、さらにとの図も、「風輪ノ所由」による視線屈折のために、日出と日没の太陽の見える方向は中央の軸に関して対称である。北に出る太陽は北に没し、南に出る太陽は南に沈んでいる。われわれの「見なし」においては、安慧の「南洲出没方位圖」は同四時説である。

五行〇八行 介石は、安慧は基本的には異四時説に立つとして、「見なし」としての同四時という考えも含め、異四時説に「三十ヶノ難」があると言う。だが、以下には「三路无

【一八丁裏】

「南洲春分」に訂正した。 一二行「日中」…同じく甲図との関係を考慮し、「日入」を「日中」に訂正。

差ノ難」「四時同来ノ難」「乖二同時一難」「交食不成ノ難」の四難だけが述べられる。

八行〇一八丁裏二行「三路无差ノ難」は、「台籠考」には、「日路内外混スルノ難」「上、九丁裏・一〇丁表」とある。なるほど、異四時説も、南洲春分の日出の太陽は内路にあり、日中は中路に、日没には外路にあると、三路を区別する。ところが、実測すると、日出に内路にある太陽も中路に見え、「日ノ入ニハ外路二有日カ百四十由旬ホト内ニ引込テ中路二入ト見ナ」すと言わざるを得ない。結局、一日の周回における三路の区別は、無きも同じである。安慧は、「風輪ノ所由」を言い、視線屈折によるわれわれの「見なし」を言うが、現量実測に押されて三路の区別を解消しているに過ぎない。介石は、そのように批判している。

I・ナセハ、外路モ内路モ一ツノ中路トミナセハ、三路ノ別ハ何處ソ

立ツヤ。

○是處上ノ圖ヲ入ナリ

加之現見スル處口、乙圖ノ如ク京市ニテ

冬至夏至春秋二分ノ日ノ出入ヲ見ルニ、冬至ノ日ハ

稻荷山ニイテ、粟一<sup>生</sup>山ノ上ニ入。夏至ノ日ハ叡山ニイテ、

V・愛宕山ニ入。春秋二分ノ日ハ清水山ノ上ニ出テ嵐

山ノ上ニ入。如此一<sup>外</sup>内正クシテ乱レサレハ、此地上ニ見ルカ如シ。

天ニカ、レル三路モ又、内ニ出ル日ハ内ニ入、外ニ出ル日ハ

外ニイルヘシ。細二近キ方ヲ内トシ  
路ノ筋違キ方ヲ外トス正クシテ外ニ出ル日ハ外ニ

入ルヘシ。何ソ異四時ノ説ノ如ク、出ルトキハ内ヨリイテ、

X・入ルトキハ外ニ入テ、一日ノ日ノ出入カ外内二路ニ相跨ニ

ヤ。由テ四洲ノ四時ハ本ヨリ同時ナル事論ナシ。○二ニハ

四時同来ノ難。コレハモシ異四時トスレハ、春夏秋冬

ノ四時一日ノ間ニ同ク来ルナラン。何故ソナレハ、且ク南

### 《字句注》

四行「粟一<sup>生</sup>山」二粟生山は、京都西山の南にある。

八行割注「筋」二箸。「端」の当て字か。

### 《解説》

二行「一<sup>行</sup>」介石は、「三路无差ノ難」を続ける。甲圖

が「日月行品」に基づき、三路を区別しながらも太陽は三路

を跨ぎ行くとしているのに対し、乙圖は、専ら現見（現量実

測）に基づき、太陽の運行としても三路を明確に区別してい

る。このように実測において三路の区別が明確である以上、

実際の天（太陽軌道）も、三路が区別されているはずであり、従って同四時説が正しいと、介石は主張している。

ところで、異四時説の甲図においては、太陽の日周運行の中に三路の区別がある。そのため、三路の区別は解消されざるを得ない。他方、同四時説を示唆する乙図においては、一々

の周回路は太陽の日周軌道であるが、三路の区別は太陽運行の年周変化を示す。このように、異四時説が太陽の運行を専ら日周変化の形で考えるのに対し、同四時説は日周運行と年周運行とを分ける。そこに、両者の重要な相違点がある。

一 一行く一九丁表一〇行 介石は、異四時説は自然の年周

### 【一九丁表】

I・洲春分ノ如キハ、前ノ甲ノ圖ノ如ク、日出ニハ日ハ内路

ニアリ、日中ニハ中路ニ有、入ニハ外路ニアリ。其日出ニハ

夏至ノ日ノ如ク熱カルヘシ。日中ニハ、春秋二分ノ日ノ

如ク寒カラス暑カラス、不寒不熱ナリ。日ノ入ニハ、冬

V・至ノ日ノ如ク寒カルヘシ。寒暖ハ日路ノ遠近ノ別ヨリ

生スルモノナレハ、是非トモ理トシテ一日中ニ四時ノ季候ノ

異リナケレハナラヌ。イカニ内路ノ日ヲ中路ニ視ナシ、又外路

ノ日ヲ中路ニ視ナストモ、物ハ視ナシニヨリテ其実用カ異

ハルモノテハナヒ。タトヒ眞ノ火ヲ螢ノ火ト視ナストモ、物ヲ

X・焼キ物ヲ温ムル実用ヲ失フモノニハアラス。〇三ニハ

乖二同時一難。コレハ、異四時トシテハ同四時ト説ク二經一

乖ケリトス。旧二經一中同時ヲ説ク事多シト云ヘトモ、其ノ

著シキモノヲイヘハ、『摩登伽經』ノ下下 曰、「日月熒惑ト

変化を日周変化の中に無理に押し込めるものと批判する。その一つが、「四時同来ノ難」(春夏秋冬ノ四時一日ノ間ニ同ク来ルナラン)である。『台麓考』では、「寒暖並至ノ難」[上、一〇丁裏]と呼ばれている。



## 《字句注》

一二行「旧経」…いわゆる印度撰述部の経典を指すものと  
思われる。次丁にかけ、『摩登伽経』『宿曜経』『文殊儀軌経』

## 《解説》

一〇行・一一行 安慧を異四時論者と見なして、介石は、  
異四時の第三の難点「乖二同時経一難」(同時を説く経典に乖そむ

く)を、二〇丁表二一行に亘って指摘している。「白麓考」では、  
「枉テシユル誣ニ衆経ノ難」[上・一三丁表一四丁表]。

## 【一九丁裏】

I・辰星ト歳星ト太白ト鎮星ト是爲二七曜一。其熒惑

二年ニシテ始テ一周天。辰星一歳ニ始メ二テ一一周天。其歳星

於十二歳始一メテ一周天。鎮星ハ二十八歳三十三歳リ 乃一周天。

太白ハ一歳半始メ二テ一一周天。凡歳三百六十五日ニシテ日一周天。

V・月三十日ニシテ始メ二テ一一周天。是七曜周天數法一ノ文、是ハ

七曜東行トケル文ナリ。若西行ナラハ、日一歳ニ三百

六十遍シテクレリ。而シテ一歳ニ初メテ一周ストイヘルハ、是黄

道ノ上ヲ日々ニ一度ツ、東ニ移リユク事ナリ。若西行

ナラハ、月ハ三十日ニ三十遍シテクレリ。而シテ一月ニシテ一周天ス

X・ルハ、是白道ノ上ヲ毎十三度有奇ツ、東ニ移リ行ク

事ナリ。若異四時ナラハ、別ニ黄白道ヲ立ル事ア

タハサル故、日々一周天スル事ナリ。普門モ、須弥界曆

ヲ造ルニハ黄白道弁セサレハ曆法備ラサル故、同

## 《字句注》

一行「七曜」：日（太陽）、月（太陰）、辰星（水星）、太白（金星）、熒惑（火星）、歳星（木星）、鎮星（土星）。

## 《解説》

一九丁表二二行〜一九丁裏二二行 介石は、『摩登伽経』「明時分別品第七」の「七曜周天數法」の一文が、西行とは区別される七曜の東行を述べていることを理由に、『摩登伽経』を同四時の經典に数える。西行は、恒星を含むあらゆる天体に見られる東から西への日周運行（地球の自転運動の反映）である。それに対して東行は、恒星天に対する西から東への運動で、七曜それぞれに異なる周期がある。例えば、恒星に對する日出の太陽の位置を日々観測すると、太陽は黄道上を毎日一度弱東へ移動し、二年で一周することが知られる。『摩登伽経』に言うその他の「周天數法」も、諸惑星と月の公転周期にほぼ一致している。

異四時説は、太陽や月の日周運行の中に、年周や月周の變化を混入しているため、七曜の東行を独自に取り出して考察することができない。そのことを、介石は、「若異四時ナラハ、別ニ黄白道ヲ立ル事アタハサル故、日々一周天スル事ナリ」と批判している。

七曜の西行（日周運行）と東行とを区別するという点で、

四行「凡歳」：平常の一年。

介石の主張はより分析的である。だが、その東行の中には、惑星や月の公転運動の要素と地球の公転運動の反映の要素とが含まれている。もちろん、介石はこれら二つの要素を区別してはいない。

一二行〜二〇丁表一行 普門円通も、曆法を備える（特に日食月食を予測する）ために黄道、白道を導入し、「同四時ニ改メラレタリ」と介石は判定している。しかし、「同四時ニ改メラレタリ」という判定の根拠となる円通の言葉を、介石は指摘していない。円通は、『須弥山儀銘並序和解』の中で、黄道・白道に度々言及しているが、この『和解』は異四時に立つ。安慧は、「律師ヲ指シテ同四時家ト視タルハ大ナル誤認ナリ」〔『天文徒徑古之中道』二〇丁裏〕と言い、他方で、円通が「一般ノ異四時家ノ如ク看ラレタレトモ、決シテ然ラス」と注意してもいる。「律師：實象ノ異四時ヲ顯シ、又：現量ノ視象天ノ同四時ヲ明ス」〔同前、九丁裏一〇丁表〕というのが、安慧から見た円通の考えである。

### 【二〇丁表】

I・四時ニ改メラレタリ。『宿曜經』ニ曰、「五星以速遲至リ、

辰星

周一年

太白ハ

一年

熒惑

周二年

歳ハ

一年

並テ次第ニテ

行度ノ緩急、是於テ彰ル、。『宿曜經』ニ速ト云遲

ト云ハ東行ニテ、日々西行スル處口ノ遲速トハ表裏セリ。

V・コ、ニ釋註スル如ク、東行速カナルヲ前ニ列子、遲

キヲ后ニオク、是カ「速ヨリ至遲排爲「次第」」ト云モノニヤ。

コノ外『文殊儀軌經』

「

『處胎經』

ニミナ

同四時ヲ説ク處ナリ。爾ラハ「日月行品」ノ只一ヶ處、

庸人此ヲタヤスク見レハ異四時トトルニ似タリ。乍

X・去、深ク考フレハ「行品」却テ同四時ヲ説ク經ナリ。

其解予カ別考ノ書ニ詳カナリ。○五ニハ交食不

成ノ難。異四時ノ説ヲ立レハ、交處ニ有テ日月ハ

食ヲナサ、ル失アリ。何トナラハ、異四時ノ説ニテハ

### 《字句注》

一行ノ三行ニ「宿曜經」序分定宿直品には、「五星以速至遲。

即辰星太白熒惑歳鎮。排爲次第。行度緩急於斯彰焉。」とある。

底本の引用文中、割注は介石による、また、「鎮」(土星)が落ちてゐる。七行「…解説できなかつた。『台

麓考』「上・七丁裏、下・九丁表」は、『摩登伽經』『舍頭諫經』

『文殊儀軌經』『寶性陀羅尼經』『大集經』『宿曜經』を同四時

の經典に数えているので、『舍頭諫經』『寶性陀羅尼經』『大

集經』のどれかが入るものと推測される。

一二行交

處「…月の交点」ないしその近くを指す。月の交点は、月の

軌道(白道)が太陽の軌道(黄道)を含む黄道面と交わる二

つの点（昇交点と降交点）で、その二点は地球を挟んで反対側にある。日食は太陽と月とが同じ交点に見えるときに、月

### 《解説》

一行く六行 介石は、さらに『宿曜経』を「同四時ト説ク経」に数える。『宿曜経』も五星（五惑星）の東行について述べ、さらに「速ヨリ至レ遲」の順（周期の短長の順）に五星を配列していることに注意している。五星の配列は、西洋由来の「九重天」（天動説）に似る。

七行く一一行 介石は、多くの経典が同四時を説く中で、『立世論』「日月行品」だけが異四時を説くことがあり得るかと問い、よく検討すれば「日月行品」も同四時であることが理解できると言う。そして、その理解を「予カ別考ノ書」に述べていると言う。

「予カ別考ノ書」とは、『日月行品台籠考』であろう。『台籠考』は、九丁表裏で「理トシテ日月行品一品ニ限テ異四時ヲ説キ玉フヘキ理アランヤ」と疑問を述べた上で、四洲を廻る太陽の運行を述べた「日月行品」の文（「甲図」の解説中に引用した文など）は、太陽の日周運行を述べていると普通理解されるが、実は、太陽の年周運行の経路すなわち黄道について、それが内中外三路に跨ることを述べていると解釈している。この「日月行品」解釈は、既に介石の師環中が円通の

食は反対の交点に見えるときに生じる。白道が黄道面と成す角は、約五度と言われる。

異四時説を批判して著した『須弥界四時異同弁』「六丁裏く一二丁裏」に述べられている。介石は、環中の解釈に従っている。

なお、『台籠考』を「予カ別考ノ書」と呼んでいることからすれば、『闇中案』執筆の頃、『台籠考』（明治十四年八月発兌）は「別考」即ち草稿か刊行準備の段階にあつて、発兌されていないかつたものと推測される。ところで、安慧は、『明治十四年八月発兌』よりも前に『台籠考』を入手して、『天文徒徑古之中道』（明治十三年庚辰十二月下流）<sup>フルノナカミチ</sup>を書き、『台籠考』を批判している。従つて、介石の『闇中案』執筆の時期は、明治十三年以前ということになる。なお、介石が『闇中案』の中で「予カ別考ノ書」即ち『台籠考』に言及したことが、『台籠考』を発刊よりも前に入手する機会を安慧に与えたのかもしれない。

一一行・一二行 「五二ハ」とあるが第四難である。「交食不成ノ難」は、「交處」において日食、月食が起きることを説明できないという異四時説の難点である。『台籠考』にも「交食不成ノ難」「二十丁表」とある。また、この難の下で

介石が述べる異四時説批判は、環中の『須弥界四時異同弁』

「二二丁裏一六丁表」に沿っている。

【二〇丁裏】

I・黄白二道ヲ立ル事不能。故太陰ノ如キ望ニ当テ、

月路ト日路ト相去事、佛曆ニテハ二百九十由旬ニテ、

外曆ニテハ四十七度ニアタレリ。由テ最大併徑一度

三分三十九秒

ヲ併セタル数ナリ

ヲ求メ、以テ正絃ヲ以テ

V・距交度ヲ推スニ、僅カニ一度四十二分ナレハ、漢洋ノ諸

曆書ニ距交一十一度十三分五秒食限スヘシトスルニ、

其数不<sub>レ</sub>及事、九度七十四分五秒ナリ。何食推歩

スル理アラシヤ。是ヲ以テ食ヲ求ントスレハ、同四時ノ説ノ

如ク黄白二道ヲ立テ、併徑距交一十一度十六分

X・四五ヲ求メ得ヘシ。四時異時ノ可否圖ヲシテ知

ヘシ。

「第六難 二曜食限」ト云ヨリ、一二十三昏左五行ニ至ル。

駁シテ曰、曆理ヲ知ラス。問答評スルニ足ラス。

《字句注》

四行「ラゴ」…ラゴ（羅睺）は、ケイト（計都）とともに、

インド神話の目に見えない天体。ラゴは「交處」の昇交点近く  
くに、ケイトは降交点近くにあつて、太陽や月が「交處」に

来た時、光を覆い食を起こすと言われる。二二丁表の図は、

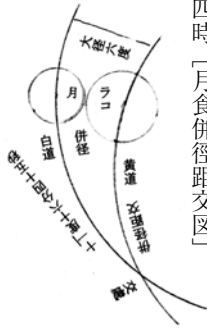
黄道上のラゴが白道上の月に接する月食開始（又は終了）を  
描いている。

《解説》

一行く二行 異四時説が食の発生を説明できない理由が述べられる。二二丁表の図と『白麓考』を参考にすると、「望」(満月)の時、日月は反対の「交處」近くにあって月食の可能性がある。しかし、異四時説は、内外二路に相当する夏至線と冬至線の差四七度を、「月路ト日路ト相去事」すなわち月路と日路の成す角と考えるから、「距交度」(ラゴと月とが重なり始めてから交点までの月路の距離。「併徑距交」とも)は、「二度四十二分」に過ぎないことになる。この「一度四十二分」(の二倍)が、異四時説の月食可能領域(食限)である。介石は、食限がこのように狭くては、月食、日食の生起やその経過時間(皆既月食は約五時間、皆既日食は約三時間)を説明することが不可能だと言う。対して、「漢洋ノ諸曆書」は「併徑距交」を「一十一度十三分五秒」として

【二二丁表】

同四時 「月食併徑距交図」



異四時月食 「併徑距交図」



る。同四時説も、黄道と白道とが成す角を六度と考えるから、「併徑距交」は十一度十六分四十五秒となり、「漢洋ノ諸曆書」とほぼ一致していると介石は言う。

二行 洋学者からの「第六難 二曜食限」は、『新論』卷之下二二丁裏・二三丁表に紹介されている。気による視線屈折のため日月が真の位置から像の位置に移されるにもかかわらず、間違いなく交處において羅睺と計都によって光が遮られ、食が起きるのはどうしてかという疑問である。安慧は、二三丁表裏において、羅睺と計都も気の働きによって真の位置から像の位置に移されるけれども、日食、月食は像においてではなく、真の位置において、間違いなく交處の食限において起きていると答えている。

一三行 介石は、「問答評スルニ足ラス」と、言で済ませている。

I. 「第七難 一三至大距」ト云ヨリ、二一十六昏初行ニ至ル。

駁シテ曰、像眞ノ二通りノ天有リトセハ、コノ二象ハ  
奚ソタ、二至大距ノ路ノミニ限ラルマヒ。日月ニモ又

是二象アルヘシ。サスレハ、像ノ二至ノ大距ノ路ノ廣キ  
V・ニ應シテ、像ノ日月ノ体モ大ヒナルヘシ。

第八、九二難モ亦評スルニ足ラス。「第十難 月中

桂影」ト云ヨリ、卷ノ終ニ至ル。

駁シテ曰、惣風輪別風輪ヲ以テ、月中ノ桂影ヲ

### 《字句注》

「同四時」月食併徑距交図」「異四時月食「併徑距交図」」  
「台麓考」「上・十四丁裏」の「同四時ノ併徑交ヲ去ル図」「異

### 《解説》

一行 洋学者からの「第七難 一三至大距」は、安慧『新論』  
卷之下、二二三丁裏・二四丁表にある。「二至大距」とは、夏  
至線と冬至線との開きで、四七度の広さになる。ところが、  
仏説は、四七度の「二至大距」を内外二路の差二百九十由旬  
と見なす。さらに、「須弥界ハ廣大ニシテ、其一度ハ四千九  
由旬余」であるから、二百九十由旬は「一度ノ十四分ノ二」  
に過ぎず、「実ニ微少」である。これほど狭くては、日月食、  
二四節季などの天文曆象を説明できないのではないか。また、  
現に太陽が「南北スルヲ見」ても、「五度ヤ十度ノモノトハ

四時ノ併徑交ヲ去ル図」を参考にして、「」内を付けた。

見エ」ないと、洋学者は批判する。

安慧は、眞象においては二百九十由旬即ち「一度ノ十四分  
ノ一」に過ぎない「二至ノ大距」も、「円準之理」すなわち  
気による視線屈折のために、「其像ニ至リテハ：四千七百分  
「四十七度」ニ見ユ」と答えている「新論」卷之下二四丁表  
「二六丁裏」。

二行く五行 介石は、「二至ノ大距」の像が気により大き  
く広がるのであれば、日月の像も他のものの像も比例して大  
きく広がるから、事態は変わらないと言う。

六行「新論」によれば、「第八難」は「四季寒暖」、「第九難」は「昼夜長短」である。僅か「一度ノ十四分ノ一」の幅しかない二百九十由旬を太陽が南北することから、四季の寒暖の変化や昼夜の長短を説明することは、不可能だという批判である。安慧の反論は、「円準之理」を使った第七難への反論と基本的に同じである。「新論」卷之下、二六丁裏〜三三丁裏。

六行・七行 洋学者の「第十難 月中桂影」は、こうである。月にいつも同じ「桂影」（月面模様）が見えることは、月が同じ面を地球に向けて旋回するとすれば説明がつく。しかし、仏説のように、月が三六万由旬離れた東洲から天頂を経て西洲へと、地に平行に運行するとすれば、月が東洲や西洲にある時には、その横面の模様が見えるはずである。ところが、

月の横面の模様は見えないから、日月が地に平行に横旋するという仏説は誤りであるという批判である。

安慧は、三三丁裏から三五丁表（卷末）にかけて、直角リズムが光線の進む方向を曲げるように、惣風輪と別風輪とが遠く東洲上の「月体下面ノ桂影」の光の進行方向を折り曲げて、南洲の地にいるわれわれの目にその下面が見えるようにしているのだと応えている。安慧は、ここで視線の曲折ではなく、光線の反射・曲折を語っている。

八行〜二一丁裏卷末 介石は、安慧の反論はここでも「氣ト風ト同物トスル」混同に陥っていると批判する。そして、氣はともかくも、風輪には「桂影」を反射する働きはないと言う。

### 【二十一丁裏】

I・写スト云ハ、同一ク一定メテ氣ト風ト同物トスルノ意ナラン。

爾ルニ、氣ト風トハ其品コロリト別ナルモノト申ス事ハ、

先ニステニ弁シ終レリ。サスレハ風輪ハ桂影ヲ写ス

ヘキ能ナシ。

闇中案大尾

〔卷之下終り〕



まとめ

1. 仏教天文学再説

仏教天文学は、円通によって西洋近代天文学に対抗して創設された。円通は主著『佛國曆象編』（文化七年「一八一〇」）の序に著述の目的を述べた中で、仏教天文学と西洋近代科学とを、「聖説」対「邪説」という信仰上の対抗関係において捉えている。だが、これは一面である。仏教天文学者にとって、信仰は自然の探求と別ではない。彼等は、西洋の地球説・地動説モデルにいわば学問レベルでも対抗して、中央に須弥山が卓立する平らな大地に平行に日月衆星が周回する須弥界モデルを、自らの自然探求として対置する。

しかし、天文現象は地球・天球説を支持するように見える。地上のどの二地点で北極星を観測しても、二地点の南北距離の差（緯度の差）に、北極星の仰角の差が対応する。この対応は地が球であることを暗示する。また、日々の太陽や月の軌道は、地に平行でなく、天頂で高く地に出没する円弧を描く。さらに、須弥山は一般人の目に見えない。

仏教天文学があくまで自然の探究であろうとするのであれば、彼らに不利なこのような観測事実を説得的

に説明しなければならない。平天平地の広大な須弥世界が西洋説の地球、天球の姿にどのようにして現象するのかということの説明が、仏教天文学の中心問題として浮上してくる。介石は仮説「視實兩象ノ理」を、安慧は仮説「円準之理」を工夫し、それによって平天平地の世界のモデルと地球・天球を支持する現象とを繋ぎ説明するという仕方、西洋近代天文学に対抗しようとした。

さらに、仏教天文学が自然探求の一面を持つのであれば、信仰に矛盾しない限り、同じく自然を探求する西洋近代科学を受容することも試みられていいだろう。例えば、安慧は、その仮説「円準之理」の工夫に際して、西洋の屈折光学や地球大気論を活用していた。

2. 介石・安慧の論争

『閻中案』を通して見られる介石・安慧の論争は、自然探求のレベルにおける西洋近代科学との対抗とその受容をめぐる論争であったと言えるだろう。『閻中案』巻之下において、介石は、洋学者からの「第一難 須弥焉アリ」に対する安慧の反論を取り上げ、結論的に「四洲二巨ル廣大ノ須弥心ヲ以テ、朗氣カイカ、ミシテ南洲ノミノ北極ノ天ノ處ニ狭ク窄シムル」<sup>シホマラ</sup>「十三丁表」

と安慧を詰問している。この詰問は、一方で、「朗氣」、換言すると安慧の気による視線屈折の仮説「円準之理」を批判している。すなわち、「円準之理」によつては、仏教天文学の中心問題を解決できないこと、「日月衆星トモニ何モ須弥ヲハ中心トセスシテ、吾ノ如ク却テ地極ヲ中心トシテ旋」「二丁裏」と主張する洋学者を説得できず、西洋天文学への有効な対抗となり得ないことを言っている。他方で、この詰問は、西洋天文学と説得的に対抗するには、日月衆星が北極を中心に廻るという西洋天文学の主張を仏説としても受け止める必要があることを言わんとしている。介石は、「北極見界ハ南洲一洲ノ星」「二丁裏」であると言うことで、北極中心天を積極的に実象と捉え、実在世界に北極中心天と須弥中心天との二重構造を導き入れる。後期の介石は、この二重構造を基礎にして、日月が北極を中心に廻る視象を説明しようとする。

『闇中案』卷之下は全体として、安慧の「円準之理」の批判である。安慧は、洋学者からの「第一難 須弥焉アリ」だけでなく、「第二難 昇降遲疾」、「第三難 日月横旋」、「第四難 曜乘風輪」、「第五難 出没方位」、「第六難 二曜食限」、「第七難 二至大距」、「第

十難 月中桂影」など、あらゆる論難に対して、専ら大気の屈折作用を指摘して反論している。介石は、「円準之理」に基づくこれらの反論が、全く有効でなく、「円準之理」に代えて、自らの「視實兩象ノ理」に基づくべきであると主張している。

介石と安慧との論争が、西洋天文学への対抗とその受容を廻つてなされていることは、介石が、洋学者に安慧を批判させる「闇中案」卷之二・九丁裏〜十一丁裏、卷之下・一二丁裏〜一二丁裏」という手法を使っていることから、見て取ることができる。

ところで、卷之下の後三分の一は、四洲四時異同をめぐる仏教天文学内の学派の論争を扱っているので、西洋天文学との関係は薄いようにも見える。しかし、四洲四時異同をめぐることも、介石は、洋学者からの論難にいかにか反論するかという視点から、安慧の「円準之理」を批判している。さらに介石は、七曜の東行（太陽の年周運行や月の月周運行、諸惑星の公転に相当する運行）を西行（日周運行）から区別して取り出す同四時説と前者を後者に解消する異四時説という論争点を指摘し、仏説における四洲四時異同をめぐる論争が、太陽の年周運行軌道（黄道）や月の月周運行軌道（白

道)の捉え方に關係し、さらに西洋天文学の「九重天」との関わりを持つことを暗示している。四洲四時異同をめぐる論争も、西洋天文学との関わりにおいて捉えられている。

### 3. 介石天文地理説における『闇中案』の位置

介石天文地理説の展開が、文久二年「一八六二」の『鍤地球説略』（『日本鍤』）を代表的著作とする前期と、明治十三年「一八八〇」の『視實等象儀詳説』を代表的著作とする後期とに分けることができることは度々ふれた。ここでは、介石天文地理説の展開における『闇中案』の位置を確かめることにする。

まず、『闇中案』執筆の時期について、検討し直しておこう。前回注釈「佐田介石『闇中案』卷之一・卷之二注釈」において、『闇中案』執筆は、明治一〇年秋から冬にかけてであろうと推測した。介石が「丁丑ノ秋」（明治十年秋）に安慧から「『日本鍤』ヲ付スル『書』（『日本鍤質問』）を贈られたという記述が、『闇中案』卷之一・二丁表にあることが根拠である。しかし、この推測を修正して、明治一〇年秋から明治一三年までの間のある時期に執筆したと幅を持たせること

としたい。その理由は、今回対象にした『闇中案』卷之下・二〇丁表で「予カ別考ノ書」と言つて、恐らく草稿段階の『日月行品台籠考』（明治一四年八月発兌）に介石が言及していること、また『台籠考』を批判した『天文捷徑古之中道フルノカミチ』に、安慧が明治一三年二月の自序を付けていることなどである。

前期と後期とを時期的に明確に区切ることは困難であろう。しかし、前期から後期への移行を示す介石の著作がある。それは、『視實等象儀記初篇』（明治十年八月刊）である。『儀記初篇』は、前期と同様「北極ノ天」を象象天とし、京都や東京など各地域でみる天を視象天として、「視實兩象ノ理」を適用している。また、『儀記初篇』は前期と同様、「須弥」について全くと言っていいほど語っていない。ただ、本文を述べ終わつた巻末において、一度だけ次のように言及している。

視實等象儀記初編

右初編ハ北極ヲ以テ日月行度ノ中心トシテ視実兩

象ヲ論ズ

視實等象儀記後編

右後編ハ蘇迷廬ヲ以テ日月行度ノ中心トシテ視実

## 両象ヲ論ズ

介石は、『儀記初篇』の後に『儀記後篇』を執筆する計画を持っていて、そこで「蘇迷廬」すなわち須弥を中心置く世界について論じる予定にしていたものと思われる。このように、『儀記初篇』は、専ら北極中心天のみを実象天とし、須弥については一言も語らないという点で、介石天文地理説の前期の特徴を持つ。しかし、須弥中心の天について語ろうとしている点では、後期の特徴を持つのである。また、北極の所在位置を京都から「万里以上二過キタルヘシ」と考える点においても、『儀記初篇』は、後期の特徴を持つ。

『視実等象儀記後篇』は刊行されていないようである。しかし、「視実等象儀記後編 右後編ハ蘇迷廬ヲ以テ日月行度ノ中心トシテ視実両象ヲ論ズ」ということに近い表題を持つ写本が存在する。上に度々ふれた『須弥視実等象儀記』である。この写本が、計画されていた『視実等象儀記後編』の初期の草稿ではなかったかと推測される。ただし、「北極ノ天」の所在位置については、前期の理解と思われる記述を残している。

『闇中案』は、明治一〇年秋から明治一三年までの間

のある時期の執筆と考えられるから、時期的に見て、『視実等象儀記初編』の刊行後執筆された後期の著作、それも後期の早い段階の著作であろうと推測される。『須弥視実等象儀記』と記述が酷似している部分があることも、『闇中案』が後期の著作であることと合致する。さらに、『闇中案』は、「北極見界ハ南洲一洲ノ星」「二二丁裏」であると言うことで、実在世界に北極中心天と須弥中心天との二重構造を導き入れ、この二重構造を基礎にして、後期の探求を導いた問題「四洲二巨ル廣大ノ須弥心ヲ以テ：イカ、[し]テ南洲ノミノ北極ノ天ノ處ニ狭ク窄シムル」をはっきりと提示している。このように、『闇中案』は、内容的にも介石天文地理説の後期に属し、後期の早い段階の執筆であると推測される。

ところで、介石と安慧の論争的なやり取りは、遅くとも明治八年の『世益新聞』二号論説の頃には既に始まっていたものと推測される。さらに、明治一年から一二年の『明教新誌』上には、介石天文地理説をめぐる仏教徒たちの論争記事が度々掲載されている。介石・安慧の論争、仏教徒たちとの論争が、介石天文地理説の後期の展開を促した要因の一つであったものと

思われる。

最後に、前回の注釈の誤りを訂正し、お詫びしなければならぬ。前回注釈の英文表題に「Sada Kaiseki」と書いたが、この間、「佐田介石」は正確には「さたかいせき」と読むべきであるということをお詫びしていた。同志社大学理工学研究所の仏教天文学研究会において、同研究所の宮島一彦教授、林隆夫教授から、小泉八雲の『神々の国の首都』（原著 *GLIMPSES OF UNFAMILIAR JAPAN*, 1894）およびハーンが参照した Capt. J. M. James による介石の講話の英訳（*A Discourse on Infinite Vision, as attained to by Buddha*, 1879）に「サタカイセキ」あるいは「Sata Kaiseki」と記されていることを教えていただき、「Sada Kaiseki」という私の読みに疑問を投じていただいた。その後、介石の住持正泉寺の佐田氏に教えを請い、正泉寺におかれても、「さた」と称されていることを教えて下さった。私の読みの不正確さを改めてお詫びし、ご教示に対し深く御礼申し上げます。

なお、本注釈に際して、龍谷大学図書館から、『闇中案』および『須彌視實等象儀記』の閲覧・筆写の機会と、『闇中案』翻刻掲載の許可を戴いたことに、厚

く御礼申し上げます。

### 参照文献

- 青地林宗、文政一〇年（一八二七）、『氣海觀瀾』（早稲田大学古典籍総合データベース）。
- 円通、文化七年（一八一〇）『佛國曆象編』（東叡大王府藏版、国立天文台三鷹図書室所蔵）。
- 円通、文化一〇年（一八一三）、『須彌山儀銘並序和解』（紀府・感應蘭若藏版）。
- 勝因道人（禿安慧）、慶應三年（一八六七）、『護法新論』三卷三冊（清明館藏梓）。
- 禿安慧、明治一〇年（一八七五）、『日本鏡質問』（写本）。
- 禿安慧、明治一四年（一八八一）、『天文健徑古之中道』（明治一二年二月自序、京都書林・布部文海堂發）。
- 環中、天保一四年（一八四三）、『須彌界四時異同弁』（龜山・栖松禪軒藏版）。
- 小泉八雲著、平川祐弘編、平成二年（一九九〇）、『神々の国の首都』（講談社学術文庫、原著 *GLIMPSES OF UNFAMILIAR JAPAN*, 1894 序）。
- 孔子、金谷治訳注、昭和三八年（一九六三）、『論語』（岩波文庫）。
- 合信（B. Hobson）著、明治七年（一八七四）、『博物新編』三刻（福田氏藏梓）。
- 佐田介石、文久元年（一八六一）、『助字彙』（吉川幸次郎他編『漢語文典叢書』第二巻、汲古書院、影印所収）。

佐田介石、文久二年二月（一八六二）、『鎚地球説略』（一名『日本鎚』）三卷二冊。

佐田拾穂（介石）、明治八年三月（一八七五）、『西洋ノ説氣ト風トヲ混シ誤レルヲ駁スル事』（『世益新聞』第二號）

佐田介石、明治一〇年八月（一八七七）、『視實等象儀記初篇 一名天地共和儀記』（出版人・藤田古梅）。

佐田介石、明治一〇年〜十三年頃（一八七七〜八〇）か、『闇中案』（写本、龍谷大学大宮図書館所蔵）。

佐田介石、明治一〇年〜十三年頃（一八七七〜八〇）か、『須彌視實等象儀記』（写本、龍谷大学大宮図書館所蔵）。

佐田介石、明治一三年（一八八〇）、『視實等象儀詳説』二卷一冊（出版人・佐田介石）。

佐田介石、明治一三年（一八八〇）頃か、『雰圍論』。

佐田介石、明治一四年（一八八二）、『日月行品台麓考』（京都書林・西村九郎右衛門版、国立国会図書館・近代デジタルライブラリー）。

James, Capt. J. M.、明治一二年（一八七九）、A Discourse on Infinite Vision, as attained to by Buddha, *Transactions of the Asiatic Society of Japan*, vol. 7, 1879.

仁藤巨寛、明治一六年四月（一八八三）、『等象齋介石上人略伝』（耕文社）。

林隆夫、平成二三年（二〇一一）、『立世阿比毘曇論日月行品訳注』（草稿）

游子六輯、西川正休訓点、享保一五年（一七三〇）、『天經或問 序圖』（松葉軒壽樓）。

《仏典》

（呉）竺律炎・支謙共訳、『摩登伽經』（東京大学・次世代人文学開発センター・大正新脩大藏經テキストデータベース）

（陳）眞諦訳、『仏説立世阿毘曇論』（國譯一切經・印度撰述部・論集部一、大東出版社。大正新脩大藏經テキストデータベース）

衆賢造（唐）三藏法師玄奘訳『阿毘達磨順正理論』〔四〕（國譯一切經・印度撰述部・毘曇部三十）。大正新脩大藏經テキストデータベース

（唐）不空翻出、『宿曜經』（『文殊師利菩薩及諸仙所説吉凶時日善惡宿曜經』）（大正新脩大藏經テキストデータベース）

（唐）圓暉述、『俱舍論頌疏』（大正新脩大藏經テキストデータベース）